

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「一人ひとりの自己肯定感を高める授業づくりと学級経営」**

受講生氏名：田中 杏実

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

自己肯定感を高めることは、主体的に行動すること、他者を認め尊重すること、コミュニケーション能力が高まること、挑戦することなど様々なことにつながり、社会に出たときにとても大きな力になると考える。そのため私の理想とする教員像は、児童の自己肯定感を高めることができる教員である。教員になったときに小学校でどのように児童の自己肯定感を高めていくのかを研究したいと思い、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア 先生が児童にどのような指導をしているのかを観察する。

イ いろいろな先生方の授業を見て、児童が「できた」「わかった」「もっと知りたい」となるような授業はどのようなものなのかについて考える。

ウ 観察して、自己肯定感を高めることにつながると感じたものを実践する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマにかかわる実践内容

前期は第6学年、後期は第1学年で演習をさせていただいた。授業では、児童がたくさん意見を言える機会を作り、一人ひとりが活躍できるようにした。普段の様子をしっかりと観察したり、積極的にかかわったりすることで、児童の個性や良さに気づき、声をかけることが出来るように努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア 児童へのほめ方の工夫

ほめ方を工夫することで効果がすごく変わるということを学んだ。ただ「すごいね」とほめるのではなく、どんなところがどのようにすごいのかというように、具体的にほめることで、児童が認めてもらえていると感じることにつながるということが分かった。また、適切なタイミングでほめることもより効果的であるということを感じた。例えば、児童を個別にほめるのではなく、全体で共有することで、自己有用感を身に付けることや、ほかの児童にも行動を促すことができるということが分かった。

イ 一人一人が活躍できる授業

一人一人が活躍できる授業を展開することで、児童が主体的に学ぶことにつながるということを学んだ。算数の授業を参観させていただいた際に、同じ問題に対して3つの手立てを用意し、児童に自分で選択させて取り組ませるという活動をされていた。自分で出来そうなものを選択することで、学力の違いにかかわらずみんなが活躍することのできる授業になっていたように感じた。一人一人が活躍できる授業をするためには、児童の実態をしっかりと把握し、それに伴って、工夫や手立てをすることが大切であるということが分かった。

ウ チーム学校の大切さ

演習を通して、様々な会議や打ち合わせに参加させていただく機会があり、その中でチーム学校の大切さについて学ぶことができた。立場や年齢に関わらず、すべての教職員の方々が意見を出し合い、話し合われている様子が多く見られた。そうすることで、視野が大きく広がり、より良いものに繋がったり、児童を学校全体で見守っていく体制を作ったりすることに繋がるということを感じた。また、行事などでは細かな情報共有や得意とすることを互いに分担し合うことで仕事の負担を減らし、効率よく業務を進めることが出来ているということも学んだ。そのためには、コミュニケーションをとり、教員間の信頼関係を築くことも大切であると分かった。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員としての基礎となる知識と、学び続ける事の大切さについて学ぶことが出来た。特に印象に残っている講義は、第7回の「小学校における外国語教育」の講義である。この講義を受けて、メタ認知をすることを大切にしていきたいと思った。自分自身をメタ認知することで、自分自身に足りないものや良さについて知り、自分自身をアップさせることに繋げていきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童との関わり方

演習を通して、児童との関わり方が成長したと感じた。前期では、第6学年と関わった。6年生は積極的に関わってくる児童が少なかったため、自分から積極的に話しかけることや、自己開示をすることや、休み時間には一緒になって遊ぶことを大切にする事で児童との信頼関係を作ることができた。後期では、第1学年と関わった。6年生とは違い、積極的に関わってくれる児童が多く、甘えてくる児童もたくさんいた。児童と先生という関係を作るために、抱っこやおんぶを求めてくる児童に対して、「みんなの先生だよ」「お母さんやお父さんとは違うよ」というような声掛けをすることを大切にして、児童と先生としての関係づくりをすることができた。

(2) 協働する力

教師力養成講座を通して、他者と協働する力を身に付けた。授業準備の際に、指導教員の先生だけでなく、その教科が得意な先生に話を聞いたり、いろいろな先生の意見を聞いたりすることで、より良い授業を作ることができた。また、同じ養成講座生同士で仕事を分担して効率よく仕事をする事や、互いの授業を見てお互いに意見を言い合うことで成長することができ、協働する力が身に付いたと感じた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座での演習や講座を通して、教師という仕事の魅力をたくさん感じることができ、教師になりたいという思いがより強くなった。児童一人ひとりのことをよく知り、良いところをほめたり、コミュニケーションをしっかりとったりすることで、私が行った授業で児童が自信をもって発言してくれるようになった。児童に愛をもって接し、信頼関係を築くことで、児童の自己肯定感を高めることができる教師になりたい。

(2) 今後の課題

今後の課題として、どの児童も「楽しい」「わかる」という授業を作ることがあげられる。演習での授業では、クラスの数人が授業に途中で飽きてしまったり、ほかのことをしてしまったりする様子が何度かあった。みんなが理解しやすいような発問をすることや、授業の山場をしっかりと設定しておくことを意識して授業づくりに励んでいきたい。そのために、今後は、ボランティアを通して、たくさんの先生の授業を観察したり、実践をしたりすることで授業力を高めていきたい。

**第16期「教師力演習講座」を終えて
「児童の自己肯定感と主体性を育む授業づくり及び学級経営」**

受講生氏名：中西 千笑

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定の理由

子どもの成長には、心の土台となる「自己肯定感」をしっかりと持っていることが重要であり、幸せに生きていくうえで欠かすことのできない要素である。その自己肯定感を育むためには主体性が必要であり、主体性を育むためには自己肯定感を育むことが重要であると考えます。つまり、この2つはセットであり、切り離すことが出来ないものである。また、自己肯定感と主体性を育むことは子ども達の人間関係を円滑にし、人生の中で困難な状況に直面した時にも諦めないで乗り越えていくための基盤を作ることにも

なる。授業や学校生活の中で子ども達の自己肯定感と主体性を育ませたいという思いからこの研究テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア 授業中の担任の発問や声掛け等に対する児童の反応を観察する。

イ 授業外での担任の指導や子どもとの接し方を観察する。

ウ 体験・研究授業の実践と考察

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

毎日1人1回以上会話するとともに、先生に特定の児童への支援方法を共有してもらい、児童理解に努めた。また、授業中における先生方の発問や指示の仕方、生徒指導の様子、それらに対する児童の反応をメモに残した。そのうえで体験授業をさせて頂き、体験授業を通して自分の課題を見つけ、さらに先生方の授業から学ぶということを繰り返した。授業中には、できた人から丸つけを行う時に、丸をしながら一人一人に声をかけたり、解けた時に一緒に喜んだりして達成感を味わわせるようにするなど、自己肯定感を育む工夫をした。

(2) 演習校で学んだこと

ア 授業について

子ども達の自己肯定感を育む為には、「わかった」「やればできる」と思えるような分かりやすい授業をすることが大切であると実感した。全員にわかる授業をする為には、支援を必要とする子どもに焦点を当てて授業づくりをすることが良いと教えて頂いた。また、分かりやすい授業づくりとして、算数の割り算の授業では、ただやり方を教えて「やってみよう」とするのではなく、答えに導くための手立てを示すことが大事であると教えて頂いた。そして、子ども達が主体的に動き、それによって得た達成感とはどんな体験よりも学習効果が高いと学んだ。

イ 学級経営について

実践演習前までは、教師が子どもに寄り添うことこそが大切であると考えていた。しかし、あえて教師が子ども達から一歩引いた状態で見守るという学級経営の在り方があるということを学んだ。寄り添うことのメリットは、子どもと教員の距離が近いということだ。一方で、あえて身を引くことのメリットは、子ども達同士で関係を築かせ、自分達で考えて行動する力を育むことができることで、これは主体性を育むことにつながる。この、あえて教員が身を引くというのは、高学年のクラスになるにつれて見受けられた。子ども達の発達段階や学級の実態などから両者を取り入れた学級経営を目指すことが大切であると学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、講師の先生方の講義やグループ協議を通じて、様々な学びを得ることが出来た。特に印象に残っているのは、第4回「小学校における児童理解と学級経営」の講義内容である。この講義で、「学級経営をするうえでこれだけは許さないというものブレずにもち続ける」「どのように指導したかではなく、どのように届いたかに心を配ること」という言葉を聞いて、子どもへの接し方や指導の仕方が変わった。いじめや人を馬鹿にする行為等を決して許さず、居心地の良い学級づくりを目指すとともに、子ども達の規範意識を育んでいきたいと考えた。また、指導の仕方を反省するのではなく、どのように届いたかに心を配り、真摯に子ども達と向き合っていくことを大切にしていきたいと考えた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座を通して、非常に多くのことを学ぶことが出来たが、私が特に身に付けたと考える力や成長したと考えることは二つある。

一つ目は、児童理解についての考え方である。児童理解は全ての土台となるものであり、日頃の様子を観察し、子どもの行動や発言の背景を考えて汲み取ることが大切であると学んだ。児童理解をするための手段は、毎日一人一人との会話や日記などのやり取りの中で深めることができると分かった。私は、今まで困った子ばかりに目を向けてしまっていたが、一見支援を必要としていなさそうな子ども達の声なき声にも気付いて支援できるようになった。

二つ目は、特別支援についてである。演習では、ADHD/LD、不登校、ネグレクト、発達障がい、自閉症など様々な子どもの実態を目の当たりした。私は最初、支援を必要とする子どもを目の当たりにした時、自分が持っている知識を生かして支援することができなかった。しかし、先生方から子ども一人一人に合った支援方法を教えて頂き、チーム学校で協力して支援していく中で、以前よりも動じず冷静に支援することができるようになった。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

子ども達が出来なかったことが出来るようになった時の感動や子ども達の喜ぶ姿にやりがいを感じられるなど、子ども達の成長する姿を身近で感じられることは教師の魅力であると実感した。先生方の実力の凄さ・偉大さを目の当たりにし、私にはまだまだ足りていないことばかりであるが、先生方のように子ども達や保護者、先生方から信頼される教員になりたい。その為にも、教師としての覚悟と責任をもち、学び続ける姿勢を大切にしていくとともに、子ども達と一緒に教員として成長していきたい。

(2) 今後の課題

教師力養成講座では、今までボランティアや大学で学んできたことを活かして取り組むことができた。そのうえで、自分に足りない物は「瞬時の対応力」、特に「言語能力」と感じた。瞬時の対応力は、生徒指導や授業、保護者対応など様々な場面で生かされるものであり、学校現場において本当に大切な力である。体験授業で、子どもの発言に対して瞬時に言葉が出てこなかったり、分かりやすく説明出来なかったりした為、語彙力を身に付けなければならないと痛感した。今後、色んな人と会話するようにしたり、先生方の対応を見て引き出しを増やしたりするなどして瞬時に対応する力と語彙力を育んでいきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて 「児童全員が安心できる学級づくり」

受講生氏名：濱村 奈桜子

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

児童にとって学校というものは、家庭で過ごす時間の次に長く、4月に決まった各学級の教室で学校生活の大半の時間を過ごす場所である。そのため、学級が居心地のよく安心できるものであれば、学校が楽しいと思う児童も増えると考ええる。

また、学級は、児童が様々なことにチャレンジし、時に失敗を経験しながらも、互いに認め合えることや褒めあうことで、自己肯定感や自己有用感を高めていくことができる場所である。そのため、児童一人一人の能力や力を引き出し、伸ばすための、学級経営はとても重要であると考えた。そこで、担任の先生方がどのような声かけや指導、かかわり方をすることで、児童との信頼関係を築き、児童全員の笑顔があふれ安心して過ごすことができる学級づくりをしているのかについて研究したいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 学級経営における先生の児童に対する声かけやかかわり方を観察する。
- イ 授業内での児童に対する先生の指導やフォロー、かかわり方を観察する。
- ウ 児童と積極的にかかわり、児童理解を深める。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期と後期では異なった学年で演習させていただいた。その中で、毎日児童一人一人を観察し、必ず一人一回、挨拶やちょっとした話などのコミュニケーションをとるように心がけた。そして、授業中や休み時間の担任の先生の指導方法や褒め方などを観察した。さらに、担任の先生や学年の先生方に児童の様子や気になったこと、困ったことなどを「報告・連絡・相談」することで、一人一人に寄り添いつつも成長させるためにはどのような指導や支援をしていくべきか話し合った。また、学級での児童の様子を観察することで、児童同士のかかわりをとらえ、児童理解が深められるようにした。

(2) 演習校で学んだこと

ア 学級経営において

児童に対して指導することがある場合、初めから叱るのではなく、児童に対して事実確認や行動の意図など児童の思いや考えを聴くことが大切だと感じた。そのうえで、その行動や言動は本当に正しいことだったのかを考えさせることが大切であると学んだ。そして、児童が失敗してしまった場合でも、正しい方向に向かう姿勢が少しでもあった際は、その瞬間に具体的に褒めることが大切だと学んだ。その際、自分で判断できない際はクラス全体に共有し、正しいことなのか、どうすべきだったのかを考えさせることで、共に学んでいけると学んだ。

イ 授業において

「わかる授業」をすることで、児童が一人一人活躍できる場面があることや、みんなで褒め合うことで、認められていると感じ、安心できる授業になると学んだ。そして、失敗しても教師がフォローしてくれる安心感で、挑戦する意欲も高くなると学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府が進める教育から様々な教科の指導方法、生徒指導など、多くの講師の先生方から、教員として必要な資質・能力、知識などを幅広く学ぶことができた。また、京都府の教員を目指す者同士として、グループワークや集団討論を通し、新たな視点や考え方を学ぶことができた。私が特に印象に残っている講座は次の二つである。

一つ目は、「小学校における外国語教育」である。この講義を通して、学級経営は空気感を作ることが大切と学んだ。講師の先生はグループ交流した際の話し合う姿や発表など少しのことでも様子や発言など具体的に褒め、そのことで私たちも楽しい気持ちや発表したいという気持ちになり、安心できる空気感がつくれているなど実感できた。具体的に褒めることはとても大切だと学んだ。

二つ目は、授業実践講座である。私は国語の授業に参加させていただき、分からないことがあった時に質問しやすい環境を作ることが大切だと学んだ。説明した後にできる子は進めて、分からない子は自由に前に出てきてもらい、質問しやすい環境でもう一度かみ砕いて説明することで、より理解が進み、授業にも参加しやすくなると学んだ。前に出る以外にも、教師が机間指導をし「何でも聞いてきて」という姿勢をみせることで、質問しやすい環境を作ることができ、分からない時があっても安心して、授業に参加することができると学んだ。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 指導について

演習前よりも、児童がとった行動にその都度、具体的に褒めることや、行動背景や意図を考えながら話を聞き、指導する力をつけることができた。また、授業や学級経営などの指導においても、常に笑顔を大切にし、時に黙って見守ることや表情で語りかけるように意識して指導することができた。さらに、指導する際の声の大小やスピード、抑揚などの大切さに気付くことができた。

(2) 気づく力

児童のことをよく観察し、気になる行動や発言などちょっとしたことにも背景や意図がないか考えながら関わることができ、演習前よりも気づく力を身に付けることができた。そして、担任の先生や学年の先生方と一緒に対応を考えていくことができた。毎日様々な行動をする児童たちに対して、児童一人一人に応じた対応をすることができた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、授業実践や学級経営だけでなく、児童がいない時間や長期休業中の教師の仕事にたくさん携わらせていただいた。そこで、責任感の大きさや大変さを実感するとともに、子どものことを常に考え、子どもたちを笑顔にしながら働く姿を見た。その姿を見て、とてもやりがいのある仕事だと感じ、私も子どもたちの笑顔あふれる学級をつくりたいという気持ちが強くなった。一人一人の児童に寄り添い、心の声も聞きとることができような、児童と共に成長していく教師でありたい。

(2) 今後の課題

今後の自分自身の課題は、授業力である。決まった授業を45分しっかり教えやり切らなければいけないと思いがちな部分がある。授業を進めることを考え、一定の子だけが分かる授業ではなく、時に立ち止まってやり直すということも試みて、クラス全員が「わかった」「楽しい」と思えるような授業をしたい。そのためにも、事前の教材研究をしっかりとすることを大切にしたい。そうすることで、授業内での子どもとの信頼関係も築け、安心できる学級へ近付けることができると考えている。

**第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「児童の気づきや学習意欲を引き出す授業づくり」**

受講生氏名：大原 さくら

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) テーマ設定理由

授業は児童にとって学び多いものでなければならない。そのため、教員の一方的な授業では、児童の学習意欲を引き出すことは難しい。今回お世話になった演習校では、先生方が児童の特性や発達段階に合わせて、様々な工夫を施した授業をしていた。また、児童同士や児童と教員との対話を多くしていた。そこで、児童の気づきを引き出すための発問や学習意欲を高めるために、具体物やタブレットを使用した「新たな発見のある授業」が大切だと考え、本演習で学びたいと思い演習テーマに設定した。

(2) 研究方法

演習学級を中心に様々な授業参観を行った。まずは、授業の展開の仕方や発問の工夫、児童への接し方を観察した。そして、その授業の中で児童の目線や発言、活動なども観察し、授業を客観的に見ていった。また、それぞれの先生方から教えて頂いた考えを深める発問や ICT の活用法、児童の特性に応じた授業の工夫を生かし、研究授業において児童の気づきや学習意欲を引き出せるように、児童との対話を意識した授業を行った。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

ア 実践内容

様々な授業から学んだことを生かし、自身の過去の経験や体験から振り返り、気づきを引き出すこと、ペア活動や文章を書くことで一方的な授業を減らし、学習意欲を引き出すという二点に重点を置き、研究授業の指導案を作成した。まず、児童の気づきを引き出すために導入で「嬉しい言葉」について考えさせた。その後、その言葉を言われた背景や気持ちについての三つの発問から気づきを引き出す計画を作成した。最後に、その経験を「どんな時」「どんな言葉」「思ったこと」の三つに分けてメモを書かせるということを行った。

イ 実践からの学び

実践からの学びは、問いかけ方の工夫である。発問の言葉を変えるだけで、児童の反応が変わることを知った。予め発問に対しての反応を考えておくと共に、授業の中で児童の気づきから追発問やイメージがしやすい問いかけをする必要がある。これらの発問をするには、普段から児童をよく観察し、児童の立場に立って客観的に教材研究をしていくことが大切だと学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

先生方の授業を参観して、児童からの発言を見逃さずに、児童の気づきを促していた。授業での発言に対して否定をせず「いい視点だね」など肯定的な声掛けをしたり、授業以外でも積極的に褒める言葉がけをしたりしていた。授業だけでなく、普段の生活の中から気づきを大切にしていくことで、児童の視野が広がり、考えも深まるということを学ぶことができた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座で、京都府の教育や現在、今後行っていこうと取り組んでいることなど、京都府の施策や理念について学びや理解が深まった。その中でも、「特別な教科 道徳」に関する講座が印象に残っている。「心を豊かに育てることで、行動、言葉、表情を変える」と

いうことを学び、道徳教育を行う上では、授業を進めていきながら教師自身も一緒になって共に考え、共に学んでいくことも必要だと学んだ。道徳科に関わらず、どの教科でも楽しいと思える授業づくりをすることで、児童が学びに面白さや楽しさを感じ、自分から新たな発見をする、気づきを広げていける授業づくりを今後もしていきたい。

4 養成講座で身につけた力と成長

(1) 身につけた力

身につけた力は、広い視野を持つという力である。講座の中で他の演習生との交流を通して、様々な意見や考えを聞くことで、広い視野や考えをもって演習校での実習を行えた。また、児童と関わっていく中で表情や言動をよく見ることで、児童の些細な変化に気づくことができた。そのため、以前よりも問題の未然防止や児童の良さや個性に気づき、視野が広がると共に親身に寄り添った指導ができるようになった。また、客観的に授業を見ることができ、より良い授業づくりに繋げることができた。

(2) 成長したこと

成長したことは、コミュニケーション力である。演習当初は、先生方や児童と上手くコミュニケーションが取れずに、距離も遠かった。しかし、演習を行う中でコミュニケーションを取らなければ、信頼関係は築けないということを学んだ。そこから、先生方には放課後に話す機会を頂き、自分から手伝えることを聞くようにした。児童とは、一日を通して学級全員に声をかけ、休み時間などでは積極的に一緒に遊ぶようになった。その結果、以前よりも積極的にコミュニケーションを取ることができるようになり、成長したと考えている。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

本講座を通して、先生方の多忙な仕事や責任感の強さを感じた。また、それ以上に先生方がきめ細やかな指導や高い洞察力を持って居心地のいい学級づくり、教育的愛情をもって日々接していることを授業や学校生活を通して肌で感じる事ができた。児童の成長と一緒に喜び、自分自身も日々成長し続けられる教員という職業により魅力を感じることができた。そのため、気持ちが引き締まり「必ず教員になる」という強い決意を持った。

私は、演習校で出会った先生方のような教師になるために、身につけた力を伸ばしながら、日々学び続けていきたい。

(2) 今後の課題

私の課題は、授業づくりである。演習の中で、先生方の知識の豊富さや工夫の多さに魅了された。全ての教科を教えるからこそ、幅広い知識が必要となる。日々教材研究を行い、各分野に関する知識や多様な価値観を身につけ、児童一人一人にあった支援をするために、課題としてあげた上記の課題を克服し、人間としても教員としても魅力のある人になりたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の学びたい気持ちをひきだす教師の働きかけについて」**

受講生氏名：植村 莉早

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、教育実習で課題解決型の授業において児童がより主体的に学ぼうとする姿を見ることができた。児童が学びたいと思えるような授業を作るには、疑問を解決したいと思えるような授業展開や声掛けの工夫が大切だと考えた。そこで、これまでに学びきれなかった、児童の学びたい気持ちをひきだすために教師はどのような働きかけをしていくことができるのかということについて学びを深めて実践したいと思い、本演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 授業における担任の先生の声掛けや発問を観察する。
- イ 担任の先生の働きかけによる児童の表情や反応の変化を観察する。
- ウ 観察、考察したうえで授業実践をする。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第2学年、後期は第4学年の学級で演習をさせていただき、合計で10回以上の授業実践をさせていただくことができた。また、授業を参観する際には教室の前方に立ち、担任の先生の働きかけに対する児童の表情や反応に特に注目するように留意した。

授業実践においては、児童と教師の一問一答にならないように、児童の疑問や気付きの発言を拾い、全体に共有することに努めた。最初は児童の発言を受け止めるだけで広げられず、気付きの声に上手く反応することが難しかった。しかし、気付きや疑問から広げていくことができるようになり、一人の発言から「みんなはどう？」と返したり、より深く考えてほしいときに追発問をして疑問の声を捉えたりすることができた。

(2) 演習校で学んだこと

ア 視覚を用いた支援や学習環境の重要性

特に、低学年の児童に支援・指導をする際、児童が机上で行う活動を黒板や大型モニターに映して一緒に行うことで、授業中に何をしたらいいのか分からず困る児童が格段に減ることを実感した。また、授業中に必要なものとそうではないものをはっきりさせ、その時に使うものだけを机上に置かせ、それ以外は使うタイミングまでしまうということ徹底することで児童が学習に向かう環境を整えることができると学んだ。

イ 児童の声を拾う大切さ

多くの先生が授業中に児童がふと発した言葉を逃さずに拾い上げ、「それってどういうこと？」と全体に投げかけたり、同じ意見の友達がいないか問いかけたりされていた。そのようにして友達の意見を全体に共有することで、児童もそのことについて考えようとする姿が見られ、「なるほど」というような声を聞くこともできた。また、授業実践をした際に授業の盛り上がりについて悩んでいたところ、一人の発言から全体に広げていくことで、より主体的に学ぶ態度をひきだすことができるのだというアドバイスをいただくことができた。これらのことから、一人の発言を拾い、全体に広げることで児童がより積極的に考え、学ぼうとするということを学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、授業づくりや教員としての在り方、人権教育やICT教育について等、京都府の教員になるにあたって必要な多様な知識を得ることができた。また、教育実践演習と並行して学んだことにより、学んだ知識をすぐに実践に生かすことができたため、より学びを深めることができた。中でも、第6回の授業実践講座において、「分かる」友達の声をつなげて、「分からない」子どもが分かるようにすることや、子どもが発した言葉をそのままつなげてあげることで児童同士の理解が深まるようにすること、「ズレ」から知りたいという気持ちが生まれることを学んだ。また、子どもの姿を大切に授業を考え、今日はこの子の発言を拾ってヒーローにしてあげよう、このように聞いたらこの子ならこう答えてくれるだろう、という気持ちをもって授業づくりに取り組むことが大切だと分かった。今後は、教員として児童理解に努め、その姿を想定し、大切にしながら児童が主体的に学ぼうとする授業を展開できるよう学びを深めていきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 個に応じた支援

本演習で初めて低学年の学級を経験し、同じことへの支援であってもそこへのアプローチは児童によって様々であるということ学んだ。具体的には、連絡帳やノートを書くのが遅い児童を支援する際に、その児童がなぜ書けていないのかを考えて支援していくように心がけた。その結果として、集中できていない児童に対しては、目の前で何かを動かして視線をこちらに集中させてから書くことを促し、他のことが気になって書くという行為に向かえていない児童に対しては、「連絡帳を書いて。」という指示だけだと入らないことを実感し、今日はどの鉛筆で書こうかと興味を持たせることで、書くことに向かわせることができた。

(2) 授業力

先生方の授業を参観したり授業実践を重ねたりするうちに、授業の構成について多く学ぶことができたのはもちろん、児童の注意をひいたり、思考を深めたりする細かい声掛けのバリエーションを増やすことができた。ここぞというときには「一度しか言わないからよく聞いてね。」と前置きをしてから話し始めたり、道徳の授業において、児童の考えをもっと深めたいと思った時に、追発問をして揺さぶってみたりすることができるようになった。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、授業だけでなく特に年度替わりの先生方の業務を知ることができ、「教師」という職業についてのイメージをより固めることができた。業務量の多さ等大変なこともあると痛感したが、それでもやはり、児童と関わり、授業や学校生活を通して未来を担う子どもの育成にあたる教職の魅力を改めて感じることができた。特に、工夫して支援・指導したことに対して児童が前向きに反応してくれたり、そのことによってできることが増えたりした時にはとてもやりがいを感じることができた。児童の様子に素早く気づき、個に応じた支援し安心感を与えられる教員になりたいという夢を忘れずに、今後も学びを深めていきたい。

(2) 今後の課題

今後の自身の課題は、声に抑揚をつけて話すことで、児童をより惹きつけられるような授業をすることである。そのためには、先生方の授業や学級指導においてどのようにして話に抑揚をつけられているのか今後も観察を続けるとともに、落語などを聞いて、「聞きたい」と思える話し方について学びを深めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童への対応の仕方 児童理解について」

受講生氏名：五十棲 紅葉

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私はすべての教育活動の始まりは児童理解だと考えている。児童を観察すると児童の困り感を感じることができる。児童を理解する中で、本当に必要な支援が見えてくる。

教育実習や支援員としての経験からその姿が見え始めた。そこで児童理解を踏まえたいうえで、どのようにして児童に対応していくべきかについて学びたいと思い、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 配属学級における担任の先生方の児童への関わりや言葉かけの観察
- イ 積極的にコミュニケーションを取り、実際に直接児童と関わる
- ウ 担任をはじめとする先生方への聞き取り

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマにかかわる実践

毎回の演習で学級全員の児童と関わることを徹底した。授業中や休み時間を通して、児童の本音に向き合うために、児童理解と関係性を深めることに努めた。また担任の先生の児童一人ひとりに対する言葉かけや個別の対応を観察することやアドバイスに学び、試行錯誤しながら児童との関わりを深めた。その時の児童の様子を理解することに努め、児童の良さを伝えることや適した声掛けと対応、授業デザインや発問の工夫などを実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア 児童のつぶやきの価値

授業中の児童のつぶやきには、学びのきっかけが詰まっていた。つぶやきを共有して、全員で考えることで予期せぬ学びの発見場面や、内容の核心に迫るような場面を実際に体験した。この瞬間の児童の表情はとても楽しそうで、連鎖反応的に話し合いを始めていた。普段発表しないような児童も、困り感や悩み事から始まった場面であることから、目を輝かせて授業を受けていた。このことから、つぶやきは学びを深めること以外にも、全員が参加できる授業に近づける効果があると学んだ。

イ 距離感の調節

児童との適切な距離感について悩み続けた。距離が近くなると指示や指導が通りにくくなる。しかし距離の近さゆえ、児童は本音で話をする。授業や悩みについて詳しく知ることが出来る。距離感が近いときは児童に溶け込んでいた感覚があった。

配属学級の先生から「タイミングがあったら責任はとるから生徒指導をしてごらん」と言われ、行ったことがある。その対応を経ってから学級の児童からの接し方が変わったと感じた。これまでは担任の先生に相談するような事も私に相談してくれた。このことから距離感調節するものだと感じた。児童を理解するために距離を近づけたり、生徒指導では教師として毅然と距離をとったりする。常に距離は一定ではないことを実感した。共に楽しむことや成長させてくれる人だけを教師として認めるわけではない。私はお兄さんではなく、教師として児童と関わることの認識へ考え方を捉え直した。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

(1) ICTの活用に向けて

仲間との協議を経て、ICTを使う環境から児童も教員も「使いたくなる」環境へ変えていく必要性を考えた。目的ではなく手段として、ICTを活用していかなければならないと学んだ。「教師自身がcreativeな授業を作っていくことは最終的に児童のcreativityを育む」この考えを大切にして、様々な疑問や課題意識をもってICTの活用に向けて挑戦する重要性和可能性を学んだ。

(2) 人権教育について

人権教育はあらゆる教育活動の基盤である。しかし人権教育は知識だけではなく、知識が行動や態度に表れなければならない。人権週間だけで考えるのではなく、日々の生活や指導の中で、人権を守る意識を育んでいく必要がある。そのために私たちは、人権問題を正しく理解したり、人権意識を高めたりしていかなければならない。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童の表情の見取り

朝や授業中の児童の表情を見ながら、普段と様子が違うときには寄り添って声をかけるようにした。日頃から表情を意識することで些細な変化に気付くことが出来た。些細な変化から共に成長を喜ぶことに繋がったり、相談できない困りごとに気付くことも出来た。そして共感的に関わることを通じて、児童との信頼関係が構築されることも実感した。表情から児童を見取る力が演習で大きく成長した。

(2) 授業力

私の授業力はまだまだ足りない。沢山の授業を通して、いくつもの失敗を経験した。しかしその失敗が私の授業力向上の糧となった。最初と比べると見通しをもてたり、児童を俯瞰する余裕も生まれたと思う。児童の言葉を大切にして授業に臨み続け、つぶやきへの感覚を高めることができた。

児童の言葉を活かす授業には「児童の思考を揺らす言葉の精度」と「単元を通して目指す具体的な児童像」をもつ必要があると学んだ。

フリートークや児童に委ねる授業などを行った中で、学びがない授業は「やった感」で終わってしまうと実感した。その経験を踏まえて単元の見通しを持ちながら着実に力をつけることで、授業が円滑に進むことを実感することができた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、児童の成長に携われる仕事のやりがいと責任を感じた。先生方の姿を見て、憧れの気持ちはより一層強くなり、教員になるという決意が変わった。私は児童の成長と学びに責任をもちながら、一人ひとりとことん寄り添うことを目指す。児童が挑戦することの面白さと魅力を体感できる授業を目指し、夢や目標を語れるような魅力いっぱいの子どもたちを育てていく。困難を児童と共に乗り越えていける教員になる。

(2) 今後の課題

教員としてではなく学生として児童と関わってしまうことがあった。生徒指導では毅然とした態度で、駄目な事は駄目と言わなければならない。教員としてメリハリのある指導をすることで児童との信頼関係も深まる。授業も面白いだけで終わることがないように、着実に力を付けることが出来るようにしていく。教師として目指す理想を持ちながらも学びに責任感をもつ。ボランティアの活動を通して、教師としての責任感について考え続けたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「絵、図などを活用した視覚的な授業づくり」**

受講生氏名：武末 夏野

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定の理由

演習校で初めて算数の個別指導を行った際に言葉だけの指導でうまく児童に理解させることができなかった。そこで、説明のために手書きで数図ブロックを書いてみると児童に理解させることができた。従来の言葉での説明に加えて効果的な図や絵を活用することが、より児童の深い学びや理解のしやすさにつながると考え、研究テーマに設定した。自身の課題と捉えている板書を、より見やすく分かりやすいものにしていくためにも活用できると考える。

(2) 研究方法

- ア 配属学級において担任の取り組みを観察
- イ 体験授業や研究授業での実践と考察

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

机間指導の際に常にバインダーを持ち歩き、必要な場面で視覚的な情報を加えて指導を行う。担任の板書を毎時間メモして視覚的工夫を考察し、自身の授業実践に活用する。

(2) 演習校で学んだこと

ア 前期(1学年配属)での学び

前期では、言語能力の発達がまだ十分でない児童への指導に視覚的な情報の援助が必要不可欠であることを学んだ。自身が体験授業で行った算数では、数図ブロックを活用することで数量の認識に関する児童の理解をさらに深めることができた。また、数図ブロックを活用している様子を観察すると加減の計算で答えを求めることはできるが、計算の意味を理解できていない児童も存在することが分かり、計算能力を鍛えることだけでなく、意味を理解させる指導も行っていかなければならないと学んだ。

イ 後期(3学年配属)での学び

後期の3学年での演習では、自身が課題と捉えていた板書能力の向上に視覚的な情報が活用できると学んだ。特に道德の授業では、場面絵の挿入や発問やキーワードになる言葉をあらかじめ準備して貼り出すこと、チョークの色を複数使用することなどを通して児童がより分かりやすい板書の方法を学ぶことができた。改善前と改善後の自身の板書を見てみるとその成長がはっきり分かるものとなった。

後期配属学級には難聴の児童が在籍しており、その児童とのコミュニケーションにはこれまで以上に視覚情報を活用した。意識するあまり、情報過多にならないように必要な情報がより伝わりやすくなるための工夫の重要性も学ぶことができた。特別支援の観点で見ても視覚的な授業づくりは有用性があると知ることができた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では毎回テーマに沿った専門的な知識を学べたことと共に、すぐに受講生同士での情報や意見のアウトプットができた。さらには翌日からの演習で学んだことを実践することで得た知識をさらに確かなものにしていくことができた。これからの教員生活もこのようなサイクルを形成して学び続ける教員であり続けたいと思うことができた。

「特別の教科道徳」の講座では、「心を変えて行動を変える道徳」と「行動を変えて心を変える生徒指導」の両輪によって児童を育成していく考え方を学ぶことができた。混同してしまいがちだった道徳と生徒指導の違いを知り、正しい道徳科授業の目標設定ができるようになった。また、「教員の言葉より友達の言葉の方が響きやすい。」という言葉がとても印象的だった。より深い学びに向けて、児童らが意見を言いやすい学級づくりをしていくことも大切であると学んだ。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

演習では計16回体験授業を行った。連続して授業を行うこともあり、一つの授業に対して準備できる時間は少ないこともあったが、「夢・未来」講座での学びを生かして毎授業必ずねらいを明確にして、そこに向けた授業を行うことを意識することができた。また、演習テーマの「視覚的な授業づくり」の意識でより分かりやすい授業を追求した。まだまだ、教員として満足なレベルの授業力には達していないが、多くの授業経験を積めたことで大きく成長できたと振り返る。

(2) 児童との関わり方

演習中は常に児童と関わることを意識していたため、私が教職の魅力と感じている「児童と共に成長する感覚」を味わうことができた。一人一人の児童と対話することでそれぞれの児童にあった関わり方、指導方法を考えていくことができるようになった。中間休みや昼休みだけに関わらず、授業間の5分休憩でのコミュニケーションを活用すれば一日の間で学級の全児童とコミュニケーションをとることが出来ることも分かった。しかし、今は学生という中間的立場であったことも児童との関係形成のしやすさに影響しているとも考える。これからは教員という立場で関係づくりができるように力をつけていくようにしたい。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座のすべての演習を通して、自身の教員になりたいという思いと使命感がより一層強くなった。何よりも教育者として児童と関わることに日々幸せを感じ、これから教員として生活する私の未来像がより明るく明確なものとなった。日々、研鑽を積んでいき児童と共に幸せに生きられる教員を目指したい。

(2) 今後の課題

今後の課題は全体指導と個別支援のバランスである。修了授業の事後研修でも机間指導がもう少し必要だと指導をいただいた。また、児童から集めたワークシートの振り返りを見ると、児童間で授業への理解の差が見られた。全体の授業の流れを意識するあまり個別の指導が行き届いていなかった結果であると反省する。今後は授業のクオリティを維持したまま、個別指導も十分に行える力を身に付け、学級全員が学べる授業づくりを行ってきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「一人一人の個性を生かした学級づくり」**

受講生氏名：楠 青空

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

児童が学校生活の中で一番多く過ごす学級は、一人一人が生き生きとした姿が見られるような環境に整えていくことが大切であると考えます。また、児童の個性を教師が誘導するのではなく、自分自身が学級の中にいることの存在感を感じることで個性の良さを伸ばせるとともに、学級の中で輝くような姿を育成できる学級経営力を身につけたいと考え、このテーマを設定しました。

(2) 研究方法

- ア 児童と積極的に関わりを持つ中で、児童が持っている個性を知り、児童理解に努める。
- イ 学校生活を送る中で、得意とすることや個性のよさの伸ばしを図る。
- ウ 事細かなことのコミュニケーションをとり、信頼関係を培う。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期では1年生、後期では6年生の学級に入らせていただき、児童と多くのコミュニケーションをとることを大切にして演習を進めた。授業の支援だけでなく、行事の話や給食指導等で関わりを増やし、児童の事細かな変化を観察した。一人一人の個性を学級の中で生かせるように、学習等の活躍の場を設けることを学んだ。

自分自身では、担任の先生が実行している姿を見て、児童に関わり個性の良さを見つけ、本人がさらに「よさ」を伸ばすことのできる声かけを行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア 授業や帰りの会について

演習を通して、一人一人の個性を存分に引き出しその個性を生かした授業にするには、児童が生き生きと輝いている姿になるような発問を行い、その個性に合った活動をして褒めて良さを伸ばすことが重要だと感じた。また、帰りの会に日直の良いところを見つけ伝える時間を設けることで、その子が持っている個性を認めることに繋がると学び、児童が自分の良さを認められるようにしていきたい。

イ 児童と関わって

多くのコミュニケーションをとることで、まずは教師が児童の個性を認め生かせる場を見つけることを探ることが大切だと学んだ。この演習を通して、児童の個性を知るとともに、個性を学級内で生かす声かけやその場面が設けられている事がわかり、自分自身でも個性の生かし方を学ぶことができた。また、教師だけが理解をするだけでなく、クラスのみんながその児童の活躍場面だと気づく学級にしていくべきであると考えた。

ウ 先生方と関わって

児童は先生の行動をよく見ているため、一つ一つの行動や指導を意味あるものにすることを学んだ。これは、二人の先生に同じようなことを聞き、授業を行うときに限らず、学校生活全てにおいて児童と関わりを持つときに気をつけることを学び、自分自身児童と関わる時に一つ一つの行動に意味があるものにしていきたい。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育について様々な先生の講座を受けて、児童の実態を知るとともに、自分が行なっていきたい教育について深く考えることができた。講座の中で、講座生と交流をはかりながら課題について考えることで、新しい考えに触れる機会や共に深く考えることなどがあり、とても貴重な経験となった。

講座の中で特に印象に残っていることは、教育実践講座Ⅰ第4回目の「小学校における児童理解と学級経営」である。積極的にコミュニケーションをとるときに、日頃から言葉に耳を傾け、児童の思いを受け止めるようにすることでその児童の背景を知るきっかけにつながってくることである。また、学級経営は児童の実態を把握するとともにその児童の発達状況に影響を受けることを言っておられた。児童にとって学級は学校生活の中で一番多くの時間を過ごし、信頼関係が特に出来上がる場でもある。これから教師として児童理解をしていく中で、児童の思いを受け止めるコミュニケーションを行い、自分自身の成長にも繋げられるようにしていきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 身に付けた力

私が教師力養成講座で身に付けた力は授業力である。今までの授業は、目標に向けて全ての児童が「できる」という目標のみを考え、自分を取り入れたい授業の展開にしてしまっていた。しかし、授業を行うにあたって全ての児童が「わかる、楽しい」と感じる授業にすることの重要性を学ぶとともに、「わかる、楽しい」となる授業を行うようになった。また、導入や展開の部分で児童の気持ちを掴む工夫を入れることで児童が興味・関心の持てる授業を行えるようになった。

(2) 成長したこと

学校生活の様々な場面の観察力である。この4ヶ月間で、児童同士との関わり、教師と児童との関わりについて観察をしてきたことで、授業と休み時間の過ごし方や様子が様々であることとその児童の特徴がわかるようになってきた。また、学校に行く機会を多くすることで児童のつまづきを予想することができてきた。この教師力養成講座によって、自分自身のこれまでの課題が少し解消したとともに新たな課題も出てきて、見つけることも大きな成長につながっていると考えている。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

私は「夢・未来」講座や演習校での実践を通して、多くの児童や先生方と関わりをもって、今まで以上に京都府の教師として児童の育成に携わっていきたいと考える気持ちが大きくなった。演習校の先生方は、児童が学校にいない時間帯に教材研究や準備をし、学級経営に向けての業務を行われていて、私も先生方のようになりたいと考えている。全ての事が児童の教育に関わることを念頭に置き、信頼関係に繋がる関わりを大切にする教師になれるよう努めていきたい。

(2) 今後の課題

教師になるために、自分自身でまだ未熟で足りない部分がある。授業が学級経営に繋がっていることから、45分でわかりやすい授業を行っていきたい。その中で、一人一人の個性をもった存在や発言を生かせる学級にする事が課題である。学級の中で個性を生かすためにも、日々児童の実態を把握し、コミュニケーションを積極的に図っていきたいと考えている。また、教師力養成講座での学びを生かすとともに、自己研鑽に励み、実践していきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人が活躍できる授業について」**

受講生氏名：馬場 寿理

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

学校では、授業を受ける時間がほとんどであり、授業での活動は児童に大きな影響を与えることができると考えている。そのため、「児童が活躍できる」授業を展開することにより、自己有用感から自己肯定感を得ることができると考えた。自分自身、多くの人の前で発言をすることに抵抗があった時期があった経験から、児童に協働的な活動を通して活躍し自信をつけて欲しいと考えたため、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 配属学級における担任の児童への関わり方や授業を観察する。
- イ 授業内の担任の発問や児童の発言に対する反応の仕方を観察する。
- ウ 授業実践を通して積極的に児童と関わり、児童理解に努める。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期演習では第3学年、後期演習では第4学年の学級に入らせていただき、学級終わりと学級始まりの児童の変化などの観察を行った。また、配属学級における授業の様子や担任と児童の関わりについての観察も行った。さらに、あらゆる場面で積極的に児童と関わり児童理解に努めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア 授業について

「誰一人として取り残さない授業」を心がけることが非常に大切であることを学んだ。「取り残さない」ということを踏まえた上で、「児童一人一人が活躍できる授業」を実践することが大切である。「活躍」というのは、授業内で発言することだけでなく、協働活動において児童一人一人が自分の考えをもち他者と交流することも「活躍」だと私は考えており、配属学級の授業内で児童同士の活動が行われている様子を観察し、改めて児童一人一人が授業に参加できるように配慮することの重要性を学んだ。さらに、授業で正解とは異なった発表をした児童に対する反応に関しても発表したことやしっかり自分の考えをもって授業に参加したことに対して褒めるなど、児童の学習意欲を損なわないようにする工夫が必要であり、日々児童と関わり関係性を築くことが授業にも影響するということを感じることができた。

イ 児童との関わりについて

児童にとって担任は学校生活を過ごす中で一番長く関わる存在であり、学校での学びに大きな影響を与える存在である。そのため、できるだけ多く児童と関わることを心がけた。児童との信頼関係を築くことにより、授業が円滑に進んだり、学習意欲や自信をもたせることができたりと様々な面で影響を与えるのだということを改めて感じることもできた。このことから、小さな変化に気付くことができるよう児童をよく観察し、積極的に話題を振り会話をすることが重要であると学んだ。さらに、児童との信頼関係が学級経営等にも非常に重要であることも学ぶことができた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、小学校教育に関するだけでなく教員を目指す上で知っておくべき知識や、京都府の教育に関する課題や取組について、様々な立場の先生方から貴重なお話を聞き学ぶことができた。また、他の受講生と交流し様々な考えや意見を共有することができたことにより、自分の考えが広がり新たな発見をすることもできた。

特に印象に残っている講義は、第10回「学習指導要領に対応した学習評価」の講義である。「評価が変わるということは、授業が変わるということ」ということから、「何のために学ぶのか」を実践できる授業を心がけることが大切であり、何に注目させるのかを考え意識するようになった。また、見方・考え方が働くような活動を取り入れることで児童の能力を高め成長させることができることを学んだ。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 気付く力と対応する力

日々の学校生活で児童と関わる機会が多く、今まで気付くことができなかったことに気付くことができ、自分の視野が広がったように感じる。先生方の児童への対応や反応を学ばせていただいたことにより、気付いたあとの対応も考えるようになった。授業でも児童の反応をみて臨機応変に対応することで授業の質が高まることから、気付き対応する力を大切にこれからも児童の変化に気付くことができるよう努めたい。

(2) 教員としての自覚や責任感

演習校で、先生の授業や児童と関わる以外にも、卒業式や入学式、春休みなど児童がいない場での教員の仕事について学んだ。児童が見ていない場でも、教員としての自覚を持ち、常に児童のことを考える先生方を見て、自分もどのように行動すべきかを考え判断するという自覚をもつことができたように感じている。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教員という仕事のやりがいや責任感を感じることができた。先生同士が協力し合い児童たちがより良い学校生活や日々の学びを活かすことができるように努めている姿は輝いて見えた。さらに、児童たちの成長を身近で見ることができるということに魅力を感じ、教員になりたいという思いが強くなった。また今まで指導していただき、学んできたことを忘れず教員になった際に活かして児童たちの学校生活を支えていきたい。そして児童とともに、自分自身も学び続け一緒に成長できる教員を目指していく。

(2) 今後の課題

今後、生徒指導力が課題である。演習を通して児童との関係を築くことに関しては以前よりも身につけることができたと感じている。しかし、指導すべき場面ではっきりと伝えられないということがあり、まだまだ不安が残る。今まで学んだことから自分に合った指導方法をこれから身につけていきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「主体的な学びを深めるための『より分かる』授業について」**

受講生氏名：村山 唯菜

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

児童自身が「学びたい」「もっと知りたい」という感情をもち、学習に取り組むことが教育を行う上で最も大切なことであると考えます。児童にそのような感情をもたせるためには、教師が魅力ある授業や学級全員が分かる授業を行う必要があります。授業の内容を正しく理解することで新たな疑問などをもち学習に前向きになると考え、学級の児童全員が「より分かる」授業について学びたいと感じたため、この演習テーマを設定しました。

(2) 研究方法

- ア 児童が授業の中でどのような活動を行っている時に主体的に学ぼうとしているのかの観察
- イ 授業内での担任の先生による工夫や児童への声掛けなどの観察
- ウ 児童の実態を把握し、体験授業や研究授業の実践と考察

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

演習前期は第4学年、後期は第3学年に入らせていただき、中学年での授業の組み立て方や児童が興味をもてるような授業実践について観察しました。また、机間指導や休み時間において積極的に児童と関わり、教材研究や授業準備をする中で児童の実態に合わせた授業をつくることのできるよう努めた。そして、体験授業や研究授業では学級の児童全員が学習内容を理解できるよう模擬授業を何度も行い、授業内でできることを考え実践しました。

(2) 演習校で学んだこと

ア 授業づくりについて

授業を考えるにあたって何度も模擬授業を行い、適切な発問の仕方や児童の発言に対する反応、児童同士の考えをつなげるためにどのような発言をしなければいけないのかなどを考え、児童の目線で授業を考える大切さについて学び、授業に活かすことができた。また、一人ひとりの児童にあった指導ができるよう机間指導での声掛けや支援が必要な児童に対してどのような手立てが必要なのかなどについても学ぶことができた。

イ 学級経営について

学年によっても学級によっても児童の雰囲気は全く違ったものであり、2つの学級に入らせていただき担任の先生のお話を聞くことで、学級の中で一人ひとりの児童にどのような配慮や関わり方が必要であるか、学級全体としてはどのようなことに注意しなければいけないのかなど考えなければいけないことは非常に多くあるということを学んだ。

また、何か事が起こってしまう前に的確な指導をされているという点がとても印象的であった。起こってしまった後に、どうすべきだったのかを考えることも大切なことだが、行動に移す前に「今からやろうとしていることは間違っていないか」を考えさせ、先を予測して行動する力をつけさせるようにしておられた。中学年は善悪の判断を正しくできない中でもある程度の力を持っているため、何かが起こってしまったから考えさせるでは遅いということもある。そのように、児童の身体的成長と心の成長を掛け合わせた上での指導を考えることが大切であるということも学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、たくさんの先生から多方面での貴重な経験や教師を目指す上で知っておかなければいけないことなどについてのお話を聞かせていただいた。その中で、様々な物事を自分ならどう捉えどのように取り組むかなどを考え、ペアやグループで他の人と意見を交流し日々考えを深めていくことで、教育や今後の実践について考えを深めることができた。

中でも特に印象に残っているのは、第6回目の講義の「学びの連続性をつくる」という言葉である。実際に算数の授業を受けながらの講義であり、円の面積を求める際に「今までどのように考えていたか」を問われ、自然に既習の内容を振り返るよう構成されていた。授業は1時間で終わるものではなく、単元を通して児童自身に次の課題をどのようにして取り組むべきなのかを考えさせ、児童から考えを引き出すことが大切であるということを学んだ。また、授業中の発言に相槌を打っている児童にあえて「今のはどういうこと？」と問い、発言させることによって「分かったふり」を逃さず、授業に活かしていくということも学んだ。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座を通して、身に付けた力や成長したことは二つある。

一つ目は、一人ひとりを見て関わるということについてである。2つの学級で継続的に児童と関わる中で、一人ひとりの児童がどのようなことを得意としていてどのようなことを苦手としているのかを観察し、ある程度理解した上で関わりを持つことで上手くコミュニケーションをとり、授業でもその関係性を良い方向へ向かわせることができたと感じている。また、担任の先生と児童の様子などについて話すことで、担任の先生から見た児童の様子なども知ることができ、私だからこその児童への関わり方にもつなげることができたように思う。

二つ目は、授業についてである。体験授業や研究授業を通して、児童の理解が確かなものになるよう視覚化した板書やPPTを用いたり、努力を要する児童への手立てとしてヒントカードを用いたりして児童に合った授業を考え指導を行った。授業を考える際には自分が授業を受ける立場に立ち、どのような点でつまづく可能性があるのかを考え、その点を解消できるよう先に述べたような手立てを用いる他にも分かりやすい発問を心掛けるなどして授業を構成することができた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教師になりたいという思いがより強くなった。授業や休み時間に児童と関わる中で、改めて教師という職業に就いた者しか得ることのできない達成感や喜びなど様々な感情を持つことができたと感じている。児童にとって6年間という長い時間を過ごす小学校であることを常に頭に置きながら、児童に身に付けてほしい力はあるどのようなものであるかを考え、自分自身も人として成長しながら教育に向き合えるよう頑張っていきたい。

(2) 今後の課題

今後の課題として、授業力の向上があげられる。中でも、児童の発言を活かして授業を進める力を向上させる必要があると考える。今は自分が作った授業の流れを児童にはめてしまっているのが現状である。児童の学びを深めるためには、児童同士の学び合いが1番であるため、今後授業を繰り返し行ったり授業を見せていただいて学んだりする中で、児童同士の発言をつなげるように力をつけていきたい。また、机間指導などで見た児童の考えを順序良く授業内で活用できるような力もつけていく必要があると考える。

**第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「児童が発言しやすい授業づくり」**

受講生氏名：梅原 彩華

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

教員養成サポートセミナーでの活動を通して発言できるということは授業づくりや学級経営において大切なことのひとつであると感じたため設定した。今回設定したテーマの「発言」には理由に二つの視点がある。一つ目は発言することができる学級の環境をつくること、二つ目は発言しやすい授業をつくることである。そのために何が必要なのかを学び、また、児童が安心して学級で過ごしているのか判断する材料の一つにもなると考えこのテーマを設定した。

(2) 研究方法

ア 学級内の児童の関係性や、授業外での先生と児童の関わり方を観察する。

イ 児童との対話の様子とその反応を主な焦点に先生方の授業を観察し、考察する。

ウ 授業実践を行いその内容を振り返り、考察する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

演習を通して発達段階の違いにも意識して観察を行った。観察をする中で気になったことや疑問に感じたことは担任の先生へ質問をし、その後自分なりに考えるといったことを心掛けて行った。また、授業実践においては児童にとってどのような発問が発言しやすいのか、そして、授業の環境や雰囲気についても観察を基に検討し実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア 先生の表情と話し方について

発言しやすい環境づくりのためには学級内での関係性も大切であると感じた。その中で、教師が児童にとって安心できる存在であることは必要だと考えた。マスクを外すだけで伝わることも変わるように感じたため、表情というのも安心できる要素の一つになると考える。

イ 児童の発言に対する教師の反応とその活用

児童が発言するにあたって大切なことは安心して挑戦できることだと考えた。授業観察を通して、児童が間違えたことも教師がその考えや意見を肯定的に取り入れることで発言しやすい授業につながると感じた。また、様々な児童の発言を組み合わせ考えを深めるということも行われており、考えたことを誰が何度でも発表して良いという授業の構成も発言しやすい授業のために必要なことだと考えた。

ウ 児童実態の把握

授業実践を通して授業内での発問だけでなく、日常的に会話を通して児童と関わることも児童の発言を引き出す方法だと感じた。児童と日常的なコミュニケーションをとることは先生が「自分の意見、話を聞いてくれる。」という存在になることにつながるため、児童にとって発言しやすい環境づくりと授業づくりに必要な要素の一つになると考えた。また、低学年と高学年では児童との関わり方で気を配る視点も変わってくるため児童の実態に応じた関わり方も重要になってくると学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では授業づくり、学級経営、児童理解、評価の方法など様々な知識を身に付けることができた。

特に印象に残っているのは、道徳教育の在り方である。教科としての道徳に視点を当てたとき、どうしても国語的要素が入ってしまいがちだが、講座を通して道徳の授業の構造を頭の中で少し形作ることができた。授業を通して児童・教師が自己を見つめ、学級内で生まれる多様な考えを基にこれからの自己の生き方について考えるという形が主体的・対話的で深い学びにもつながることも学んだ。

また、道徳の授業を行う際に児童に対して「間違いはないから、思ったことを自由に出し合っているんだよ。」といった言葉がけや、発言を聞くときに近づくことで話しくなるといった心へのアプローチの大切さを知ることができた。そして、これは学校生活のどの場面でも活用できると感じ、「包み込まれている感覚」を児童に実感させられる一つの方法ではないかと考えた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 自ら行動する力

「夢・未来」講座や小学校の演習を通して積極的に関わる力がついたように感じる。以前は自分に自信がなく、遠慮する気持ちや相手の様子を必要以上に伺いすぎてしまう傾向にあったが教師力養成講座での活動を通して、疑問に思ったことは先生に質問できるようになり、学べることも増えたように感じる。また、先生の業務の中で自分に出来ることを自ら探すこともできるようになったことで、授業作りの工夫や学級開きに必要なことについても先生から直接聞き、実践的に学ぶことができた。

(2) 教師としての意識

教育実習とは違いより長期的に児童や先生と関わる中で教師としての児童への関わり方を深めることができた。例えば学年に応じて関わり方を変えることが必要である。高学年であれば人の気持ちを考えさせ、低学年であれば自分の行動を振り返り考えさせていた。発達段階に応じて児童との関わり方とそれぞれに必要なことを考え、意識していくことを考えるきっかけとなった。教師は教科を教えることが大切だが、それ以上に人との関わりを学ぶ時に携わる重要な立場にあるという意識がついた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座での活動を通して、教員の仕事をより間近で知ることができ今まで以上に教員になりたいという想いが強くなった。児童の成長を間近に感じることでできる楽しさや、授業の工夫によって変わる児童の反応から感じるうれしさなど、とてもやりがいのある仕事だと感じた。学んだことや経験したことを活かして児童が安心して過ごせる学校を目指し、興味を持って主体的に学びを深めることができる授業づくりを教員になった際も追及し続けたい。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、「授業力」である。授業づくりにおいて、児童の実態に応じて検討はしたものの、実際に授業を行うと発問の仕方に課題を感じたり、授業の展開以外での雰囲気づくりの難しさを感じたりなど新しい課題がたくさん見つけられた。また、授業展開を考える中で児童の実態と興味を持って学べる工夫ばかりに焦点を当ててしまい、目的から逸れかけてしまうこともあったため、実際に現場に立った際には必ず授業のゴールをイメージして作っていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて 「こどもの個性を活かす授業づくり」

受講生氏名：足立 玲菜

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

小学校でのボランティア活動や、教育実習でたくさんの児童と関わり、多くの授業にも参加させていただいた。これまでの経験では、学年が上がるにつれ、授業内で発言する児童に偏りがあると感じることが多かった。また、学級には、様々な児童がおり、一人一人興味関心も違うということも感じた。そこで、児童の個性をどのように活かせば、児童が主体となり、興味関心をもって学べる授業づくりができるのかと考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア 授業中の発問や教員の行動について観察する。

イ 指導教員や担任へ質問をする。

ウ 観察や振り返りでの学びを、体験授業や研究授業の際に実践する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第1学年、後期は第5学年の学級に入らせていただき、計5回の授業実践をすることができた。それぞれの学級で実践されていた授業での工夫について観察し、担任の先生がされている児童の個性の活かし方について学んだ。さらに、担任の先生の授業だけでなく、演習生の授業においても、自分ならどのように授業をするかを考えるよう心掛けた。また、授業実践を通して良かった点、改善すべき点について、指導教員、担任の先生、演習生同士で振り返りを行い、そこでの学びを実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア 児童の活躍の場をつくることについて

補助としての授業の参加や、授業実践を通して、発表することだけが児童にとっての活躍の場ではないということを学んだ。児童の中には、自分の意見を書き出すことは得意でも、発表することが苦手な子がいるなど、様々な得意、不得意をもつ児童がいる。そこで、グループやペアでの意見交流の時間をつくったり、ICTを活用し、画面共有から自分の意見を伝えられるようにしたりするなど、活躍の場をつくる方法や工夫はたくさんあると学んだ。

イ 児童の「やりたい、気になる」を活かすことについて

一人一人の個性を活かすためには、まずは「やりたい、気になる」という思いを活かすことが大切であると学んだ。また、その思いを引き出すためには児童が主体的に考えていくための手立てが必要であると学んだ。例えば、児童にとって身近に考えられる導入、わかりやすい発問、掲示物の工夫、前時に学んだことの振り返りなどである。それらから引き出した、児童の積極的な気持ちや、発言を逃さないことが個性を活かした授業づくりにも繋がると考えた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、多くの講師の方々から、これから京都府の教員になる上で必要となる知識や心得などについてご講義いただき、教員として必要な知識や考え方を学ぶことができた。また、京都府の教員を目指す仲間とともに、集団討論やグループワークなどで交流し、様々な意見に触れることで、自分自身の考え方の視野も広げることができた。

講座の中で特に印象に残っている講義は、「特別の教科 道徳」の講義である。講義の中で、「子どもは教師の言葉より子ども同士の言葉の方が響く」や「共に考え、共に学んでいく姿勢が大切」であると仰っていた。教員が道徳的価値を押し付ける形になってしまわないよう、児童自身が考え、自由な意見を出し合うことから、教員も共に道徳的価値について考える時間となるようにしたいと感じた言葉だった。また、教員が児童と共に学び続ける気持ちを大切にすることにも繋がり、とても大切な道徳教育の捉え方を学ぶことができた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 生徒指導力

私は児童に対して厳しい指導をすることが苦手だった。しかし、指導することで児童にどのような姿になってほしいのかという自分自身のぶれない軸をもち、指導を行うことを大切にすべきであると学び、先生方の指導の様子を観察し、自分なりに実践することで、生徒指導の基本を身に付けることができた。トラブルが起こったとき、お互いにただ謝ればいいという思考にならないよう、一人ずつ話を聞き、お互いに納得して解決することや、これからどうしていくかを一緒に考えるなどの指導も大切にしたい。また、児童の性格や様々な背景などをしっかりと考えた上での言葉選びを大切にし、指導を行っていききたい。

(2) 諦めず児童と関わり続ける力

数人の児童との関わりについて、担任の先生との話し合いや指導教員、演習生からの意見などを積極的に取り入れ、様々な方法を試していくうちに、教室から飛び出さなくなり、授業に参加できるようになるなど、少しずつうまくいくことも増えていった。授業においても、児童との関わりにおいても、上手いいかないことの連続であったが、数回壁にぶつかることがあっても、諦めず一人一人に合った支援方法を試していくことを心掛けることができた。児童の成長には何が必要なのかを考え、教育活動に取り組んでいくきっかけとなった。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、小学校教員や京都府の教育の実感することができ、京都府の教員になりたいという思いがより強くなった。また、自分の課題点を改めて自覚するきっかけにもなった。常に児童と共に学び続ける教師として、自分自身のぶれない軸をしっかりともち、これからも現場で学び続け、たくさん経験を積んでいきたい。

(2) 今後の課題

今後の課題として、児童が深く考えられる発問づくりを意識していきたい。言葉の小さなニュアンスひとつで発問の伝わり方は変わってしまうため、授業内の言葉選びを意識して授業を行っていききたい。また、時間に余裕をもち、深めさせたい場面では、時間を多く取るよう実践していきたい。演習を通して実感した課題点を改善し、より良い授業が行えるよう日々考え、努力していく。

**第 16 期「教師力養成講座」を終えて
「誰もが楽しいと思える学級・授業づくり」**

受講生氏名：谷口 翔

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教師から一方的に与える授業では、子どもは受容的になる。学ぶこと自体の楽しさや友達と交流することによって多様な考え方に会う楽しさを子どもが実感することで、主体的・対話的で深い学びの実現につながると考えている。

誰もが楽しいと思える授業を行うためには、学級の雰囲気づくりが必要だと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 演習学級の子どもの様子や担任の先生の子どもへの声のかけ方などの観察
- イ 子どもに興味・関心の引き出し方の手立てについての先生方への聞き取り
- ウ 体験授業や研究授業における実践と考察

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期演習では第4学年、後期演習では第6学年の学級に入らせていただき、子どもの様子や担任の先生の子どもへの声のかけ方を観察した。それぞれの学級で実践されていた授業スタイルの良さを見出し、担任の先生がされている子どもに興味を持たせる工夫を見て学んだ。さらに、自分ならばどのように授業を展開するかを考えるよう心がけ、子どもが学ぶ楽しさを実感するための工夫を担任の先生と話し合い、子どもの興味・関心を引き出すなどの工夫を取り入れ、体験授業や研究授業で実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア 話し方の工夫について

先生方の授業や子どもたちの前で話す場面を観察させていただき、話し方の工夫を学んだ。私は、声が大きく子どもの耳に入りやすいことが長所であると考えていたが、声が大きければ子どもたちは先生の話の聞こえをしなくても耳に入ってくるため、声が大きければよいということではないことに気づいた。そのため、先生方のように場面に応じて声を小さくして話してみたり、一度話を止めてみたりするなど、子どもたちに話を聞きなさいと指示するのではなく、子どもたちが先生の話の聞きたくなるような話し方の工夫が必要であるとわかった。

イ 学級経営について

誰もが楽しいと思える学級をつくっていくには、変化が大切であると学んだ。

1学期は新しい環境で新鮮なことが多く楽しむことができるが、2学期、3学期になり子どもたちがその生活に慣れてくることで、一つ一つのことに對して不十分になってしまい、当たり前のことを当たり前にすることが難しくなってしまう。そのため、子どもの成長に合わせてルールや決まり、目標をグレードアップさせることで、新たなことに挑戦することができ、子どもたちが常に新鮮な気持ちで頑張っていくことができる。

また、その成長している過程を「見える化」することによって、これまでやってきたことや成長してきたことを実感することができ、それらが子どもたちの自信につながり、自己肯定感の向上にもつながっていると学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育施策や各教科等の ICT を活用した授業実践について学んだことで、新たな視点を取り入れたり、理解を深めたりすることができた。その中でも、特に印象に残っているのは、第 11 回の特別支援教育での「障害のある子どもと障害のない子どもが可能な限り同じ場でともに学ぶこと（交流及び共同学習）」についてである。同じ場でともに学ぶとは、同じ場で学習しているだけでよいのではなく、それぞれの子どもに授業内容を理解し学習活動に参加している実感・達成感を持たせることが大切である。そのため、常に分かりやすく楽しい授業づくりができるよう取り組んでいきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

演習では合計 5 回の授業をさせていただき、授業力を高めることができた。第 6 学年の算数の授業では、2 つの学級で授業をさせていただいた。同じ教材であっても児童の反応や答えが違うため、臨機応変に教師の手立てを変える必要があると実感した。また、教育実習の授業実践のときはとても緊張してしまい、授業を進めることで精一杯になってしまった。しかし、今回の演習では、落ち着いて授業を進めることができ、子どもとともに授業をつくっていくことができた。今後も子どもの様子をしっかりと見とりながら授業力を向上させていきたい。

(2) 教員としての自覚

児童の実態をしっかりと把握するために、時間をかけて一人一人の児童と向き合うことを通して、児童の未来に大きな影響を与える立場であることや児童の命を預かっている立場であることを、改めて強く自覚することができた。

また、自分自身の考えがぶれることのないように芯を持ち、1 年後の自分を見据え、自分ならどのようにして学級をつくっていくのかを常に意識しながら意図のある行動をとるようにした。これからもこの考えや思いを持ち続け、大切にしていきたい。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 今後の課題

授業で、子どもに伝えたい・理解してほしいという気持ちが強くなり、話しすぎてしまうことがあった。子ども主体の授業をするためには、教師の話す内容を精選し、児童同士で対話する時間をつくったり、子どもとの会話を増やし子どもの考えを広げたりしていけるようにしていきたい。この課題を忘れず、楽しい授業づくりを行えるよう励んでいきたい。

(2) 教職に向けた決意

教師力養成講座を受講することにより、子どもの成長に携わることができる仕事はとても魅力的であり、やりがいが多く感じることができ、京都府の教員になりたいという思いが一層強まった。

また、子どもたちの興味・関心を引き出すことを第一に考え、私自身が授業や学校生活を楽しみ、子どもを引き付けるような教員になることが目標である。目標実現のため、子どもたちを楽しませる引き出しをたくさん持ち、信頼関係を築いていけるように教員として子どもの前だけでなく、一つ一つの行動に責任を持っていきたい。

教師力養成講座で学ぶことができたこの期間はとても有意義なものになった。このような貴重な機会を与えてくださった教師力養成講座の講師の先生や、演習校の校長先生をはじめとするお世話になった先生方への感謝の気持ちを忘れず、教員になってからも学び続ける姿勢を大切にしていきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「子どものもちあじに寄り添った学級経営」**

受講生氏名：石塚 知帆

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は子どもの多様性を尊重し、一人一人を大切にすることで、安心を感じさせられる学級を作りたいと考えている。子どもは一人一人苦手なことや得意なこと、特性などがあるがそれらはすべて「もちあじ」とまとめることができる。学習面においては、学習スピードや教材の難易度、生活面においては、教員からの声掛けの方法などにおいて、子ども一人一人に適切な対応をとることで、子どもたちはのびのびと学校生活を送り、成長することができる。そこで、一人一人の子どものもちあじを理解し、それに応じた支援や指導を行いたいと考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 各学級での担任、児童との関わりや授業観察
- イ 担任、指導教員をはじめとする先生方への聞き取り
- ウ 体験授業や研究授業、学級活動における実践と考察

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業や学級活動、休み時間などの様々な場面で、教員と子どもの関わり方、子ども同士の関わりについて観察し、積極的にコミュニケーションを取ったり、必要に応じて指導・支援を行ったりすることで、子どもの実態に直接的に触れることができた。また、放課後には担任の先生と1日のふり返りを行ったり、気になった子どもの様子や、その対応について話し合ったりすることで、子どもの理解を深めた。

(2) 演習校で学んだこと

ア 多様な子どもへの多様な指導と支援

教育実践演習校のスクールサポーターの先生が、「子どもの数だけ指導や支援の方法はある」とおっしゃっていた。学級活動におけるサポートの声掛け、やる気を引き出す方法、授業の進行スピードや説明の量などは、子ども一人一人によって全く異なる。どのような指導・支援が子どもに適しているかは、様々なコミュニケーション方法でアプローチを行い、自身のコミュニケーションに対する子どもの反応を確認し考察することで、分かってくるものだということを学んだ。

イ 子どもの実態に応じた授業づくり

子どもの実態に応じて、子どもの集中力を持続させる工夫を取り入れることで学びの質はより良いものになる。例えば、授業内での頑張りをはなまるの数で評価することや、授業中に気分転換をする時間をとることなどである。これらを効果的に取り入れることで、子どもの学びを刺激することができる。また、授業時間や子どもの様子を考慮して、一人で課題に向き合う授業や、体を動かす活動やグループで話し合う活動を多く取り入れた授業を組み立てる必要があることを学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、様々な分野の講師の方から、教員になるうえで必要な知識や技術などについて学ぶことができた。また、グループワークで、同じ京都府教員を目指す学生と話し合い、自身の体験などを踏まえた意見や考えを交流することができた。そして、多様な視点を得て、深い学びにつなげることができた。

その中でも、特に印象に残っている講義は、「授業実践講座」における「指導の個別化・学習の個性化」に関するものである。学級には、通級教室や特別支援学級に所属する子どもたちをはじめとした特別な支援が必要な子どもがいる。しかし、そもそも苦手は人それぞれであるため、学級の子ども全員に対し、多様な支援や指導が行われる必要がある。そのため、「指導の個別化・学習の個性化」の具体的な方法として、授業の説明を必要に応じて複数回行ったり、自身の興味・関心に応じ、ICTのロイロノートを使って学びを深め、共有したりするということを学んだ。これからは、ICTを効果的に利用したり、机間指導により子どもの学びの様子を的確にとらえたりすることによって、公平に学びを保障できるようにし、子どもの学びを支えていきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

子どもの実態を把握して、その実態に応じた対応をとるということが、教師力養成講座で最も身に付き、成長した力である。子どもと毎日関わる中で、私の声の掛け方や指導が子どもに合わず、反抗的な反応があったり、子どもへのコミュニケーションがうまくいかずに悩んだりすることがあった。しかし、「子どもの反応は教員のコミュニケーションへの返答」というアドバイスをいただき、子どもの姿を変えるためには、まず自分の姿を変えなければならないのだということに気付いた。

そこから、子どもへ様々な関わり方を試し、ふり返り考察し、次に生かすというサイクルを繰り返すようになり、子どもの実態への対応力が身に付いた。また、担当の先生方とお話をさせていただいたり、様々な試みをすることによって、子どもへの関わり方や、学級経営の方法の引き出しも増やすことができて、教員としての意識を高めることに繋がった。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座の中で、私は子どもに安心を感じさせるために「寄り添う」学級経営を心掛けてきた。その中で、「先生がいてくれたから楽しかった」「先生がいてくれてよかった」というような言葉を子どもたちからもらった。このことを踏まえ、私は、子どもを褒めることで子どもを育てたり、子どもの気持ちに寄り添い続けたりすることで子どもの不安を安心に変えることができるのだと確信した。子どもたちが主体的に行動すること、多様な人と繋がり新たな価値を見つけていくことも、全ては安心感が根底にある必要がある。だからこそ、私は、子どもに安心を感じさせることで成長を支える教員を目指す。

(2) 今後の課題

授業をさせていただく中で、自身の授業力の不足は大きな課題であると実感した。小学生が学校にいる時間の大半は授業の時間であるため、その授業時間は、子どもにとって楽しく、深く学び、成長できるものである必要がある。そのためには、子どもの興味・関心に応じた深い学びや、効果的にICTを使用した学び、子ども同士での対話の中で生まれる学びなどを充実させなければならない。それらを踏まえ、常により良い授業を求め、努力していく。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「自分を上手く表現できない子に対する支援方法」**

受講生氏名：堀池 古都美

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習や学生ボランティアにて、子どもたちと関わる中で毎日全ての児童と会話することの難しさを実感した。さらに、自分から話しかけることが得意な児童との会話が中心となり、児童との関わり方に偏りが生じてしまっていた。そこで、自分から話しかけたいけれど話しかけられない児童に対する支援方法を学びたいと思った。また、先生方にアドバイスをいただきながら、私自身が自分を上手く表現できない児童と継続的に関わることを通して学びを深めていきたいと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 児童の学校生活での過ごし方の観察
- イ 当該児童の様子について、先生方への聞き取り
- ウ 学校生活や研究授業、体験授業における実践と考察

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

児童同士の人間関係を観察しながら、児童理解に努めた。そして、担任の先生に児童の学校生活の様子や先生方との関わり方について聞き取りを行った。その上で、一人一人の児童の実態に応じ、休み時間の会話の中で支援を行い、関係を築く方法や、授業内での発言を通してコミュニケーションを図り、支援を行っていく方法など臨機応変に対応することを心がけた。

(2) 演習校で学んだこと

ア 休み時間における児童との関わり方

休み時間に1人で過ごしている児童全員が1人を好んでいるとは限らないということを知った。1人で過ごしている児童の中には、本当は友達と仲良く遊びたいけれど自分からは声をかけられないでいる児童もいるため、教員がその児童はどちらのタイプであるかを把握するためにも積極的に話しかけることが大切になってくると分かった。さらに、教員が他の児童と繋がりを持たせてあげることで、それをきっかけに友達と仲良く遊ぶ姿が見られたため、教員の支援の重要性を実感した。

イ 授業における児童との関わり方

自分を表現することが苦手な児童は、なかなか挙手をするということも少ないが、挙手をした際には発言する機会を設けるように意識した。そして、「この意見、どうですか」と全体に問いかけることで、自分の発言に対して反応してもらえたという実感が湧き、不安感を取り除くことができると学んだ。また、机間指導の際に、「よく考えられていますね」「とても綺麗に平仮名が書けていますね」というように声をかけることで自信が付き、挙手に繋がる様子が見受けられた。

ア・イともに共通して、支援を行う前よりも児童から積極的に話しかけてくれるようになったり、笑顔の場面がより多く見られるようになったりという変化が感じ取れた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の子どもたちと関わる中で必要な考え方や実践的な教育方法について学ばせていただいた。

特に、「京都府における人権教育」の講義が印象に残っている。『人と人との関わり』や、『社会』の在り方によって、『人権』の在り方も変わる」という言葉から、教員がどのような人権感覚を持ち、学級経営を行うかによって児童の人権に対する考え方が変わるということ学んだ。また、「人権」はすべての人に保障されるものである反面、ずっとそこにあるものではなく、絶えず意識して守っていかなければ損なわれてしまうこともあるという言葉が人権教育について考え直すきっかけとなった。そこから、まずは教員が人権について考え、人権が侵害されている状況を許さない姿勢を示すことが大切ではないかと考えた。また、人権教育は事が起きてからでは遅く、日々の積み重ねが重要となってくる。児童に「包み込まれているという感覚」を実感してもらうことのできる学級づくり・学校づくりを目指していく。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

授業実践では、メリハリのある授業を展開していく力が身に付いた。教育実習での授業を振り返ると、45分間を一定のトーンで進めてしまうことが多くあった。その反省を生かし、教師力養成講座における授業では45分の授業を15分・15分・15分の3つに分け、「説明を聞く時間」、「考える時間」、「集中する時間」というようにそれぞれの時間にテーマを決めて授業を組み立てるように意識した。そうすることで、児童の集中力も上がり、積極的に授業に取り組む姿勢が見られた。さらに、メリハリのある授業を展開することで、授業者としても時間の配分が意識しやすく、児童の学習面の実態が把握できるようになってきた。

(2) 児童理解

児童の気持ちに寄り添えるような言葉の掛け方を身に付けた。授業中に立ち歩いている児童に対して、「座りましょう」と声をかけるのではなく、「今はどんな気分ですか」と問いかけることで、なぜ児童はこのような行動をとっているのかが見えてくることに気が付いた。表に現れている言動だけに目を向けるのではなく、心の奥底にある気持ちを引き出し、寄り添うことが大切であると分かったことで自身の成長を感じた。児童と関わる際は、児童の視点に立ち、言葉に耳を傾けられる余裕のある教員でいようと思う。

5 教職に向けた決意と今後の課題

教師力養成講座を通して、「教員」という職業が身近でより具体的な目標へと変わっていった。子どもの成長の支えになれるのは、教員の魅力の一つである。私がかけた一つの言葉で、児童の目が輝いたり、「できた」「わかった」を引き出す事ができたりする職業は他にはないと改めて実感できた4ヶ月間だった。授業をしていても、一生懸命学ぼうとする姿勢から私も子どもたちと共に成長していきたいという気持ちが芽生えたのは、教育実習よりも深く教職について学ぶ機会が得られる教師力養成講座だったからであると思った。一方、たくさんの授業を経験させていただく中で、児童の学習意欲を引き出し続けることが難しいと感じた。私の目の前にいる児童の実態を把握し、学習が生活の役に立つことを実感できる授業になるよう心がけたい。

次は私が教員として、学級担任として子どもたちの成長をより間近で支えていきたいと強く思う。今後、教員として今以上に子どもたちの成長を支援するために、導入の工夫を行い、主体的・対話的で深い学びを追求していくことを課題として学び続けていく。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の主体性を引き出す授業づくり」**

受講生氏名：中川 敦貴

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す中で、教育実習や教員養成サポートセミナーでの授業実践を通して、児童から学びの主体性を引き出すことの難しさを実感した。この経験から、本講座を通して主に授業力の向上を念頭に置きたいと考えた。児童が主体的に学習へ向かえるようにするための担任の先生の工夫やそれに対する児童の反応の観察等を通して、私自身も実践につなげていきたいと考え、本演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 担任の先生の授業における工夫と児童の反応を見学する。
- イ 担任の先生が授業づくりで意識していることを聞き取る。
- ウ 見学した授業を、自分が担任であればどのような組み立てにするか考える。
- エ ねらいを持った自身の体験授業・研究授業と振り返りを通じた省察を行う。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

前期は5年生、後期は6年生の学級で演習をさせていただいた。担任の先生による授業の見学や大切にされていることの聞き取りを通して、主体性を引き出すためにどのような工夫がなされているのか学んだ。また、担任の先生の働きかけに対する児童の反応を見るということも大切に、自分ならどのように授業を組み立てるかといったことを考えた。その上で、体験授業や研究授業では、児童が興味や関心を持てるような学習活動の工夫や声掛けを特に意識して行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア 児童理解・信頼関係づくりの大切さ

初めて高学年の児童と関わるという中で、教師と児童の信頼関係を作ることの難しさを身に染みて実感した。初めは距離感をつかむことに苦労したが、担任の先生の関わり方を見ながら、日々の児童の成長や変化をよく観察し、それをしっかりと伝えることを通したコミュニケーションを心掛けた。このような会話から、児童との的確な距離感を形成でき、児童からも積極的に話しにくるようになった。計6回授業をさせてもらったが、徐々に私の児童理解が深まり、児童に合った学習活動を実践できるようになった。また、児童も意見や考えを積極的に発信できるようになったと感じる。学びにつながる授業にするには、児童との信頼関係、より良い学級経営が不可欠であると学んだ。

イ 学びの主体性を引き出すための工夫

主体性を引き出すためには、児童が興味や関心を持てるような工夫が必要であると学んだ。特に、授業の導入の重要性を感じている。私自身の経験や児童にとって身近な事象などと合わせながら、児童から課題や疑問を引き出して授業を進めるということが大切であると学んだ。また、学びの主体性は、1時間の授業の中だけにとどまるわけではない。授業の終末では、学んだことを振り返る時間をとることで、学びが整理できるだけでなく、新たな課題を見出すこともできる。それを活かして、自主学習等を通して学んだことをより詳しく調べようとする児童も見られた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

第6回「夢・未来」講座における授業実践講座では、学習者として、児童の声で作る授業をテーマとした模擬授業に参加した。児童をイメージした授業づくりや、導入で児童間の意見や考えのズレから疑問につなげて課題を作り、解決するという形を心掛けることが、児童主体につながるということを学んだ。

演習生同士の協議や集団討論等を通して、講義での学びを整理するだけではなく、各演習校での実践とつなげた対話を通して、新たな発見や気づきがあった。それを活かすことで、私自身の演習において、実践の幅が広がった。教員となった際には、今以上に様々な問題や悩みが生じると思う。その時には、一人だけの力で解決しようとするのではなく、他の教職員の方々との連携を大切にする。多面的に物事を見ることを心掛け、協働的に解決へと導くという意識を持つ。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業について

これまで経験した授業は、計画通りに進めようとすることに必死で、児童の反応や表情を見る余裕がなかった。授業づくりにおいても、児童の実態に合った学習活動を考えることができていなかった。今回、6回の授業実践を通して、徐々に児童と対話をするということを意識しながら、児童とともに授業を作り上げるという形ができつつあった。また、児童に対して教える内容を「どのように教えるか」を意識して、設定する学習活動にねらいを明確にした授業の実践ができるようになった。今後は、1年間を通して児童に身に付けさせたい力を明確にしたい。その上で、学級経営とも関連させながら、その力を身に付けさせることも踏まえた学習活動や声掛けについても考える。

(2) 学習支援について

特に算数において、学習に課題のある児童に対して学習支援を行った。初めは児童理解ができておらず、児童が受身に感じる支援になっていた。しかし、徐々に信頼関係が作られていく中で、児童から「何をやればいいのかわからない。」「振り返りって何を書けばいいの?」といった学習に関する質問が出るようになった。この経験を通して、児童との信頼関係作りの大切さだけではなく、学習の仕方がわからず、学びたいのに学べない児童がいるということに気づいた。学ぶことに困難を感じている児童に対して、寄り添う気持ちを念頭に置き、一人一人の学びを断たないような手立てを考えるきっかけとなった。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

前期・後期と学年を持ち上がったため、中には4か月に渡って関わってきた児童もいる。そのような児童の日々の変化や成長に直接携わることができたことで、教職の魅力や楽しさを再確認した。そして教員になりたいという気持ちをより一層高めた。児童理解に向けた様々なアプローチに挑戦したが、そのほとんどがうまくいったわけではなく、試行錯誤を繰り返した実践となった。この4か月で築いた信頼関係作りへの過程や手法は、今後活かしていきたい。

(2) 今後の課題

私の課題は、「想定外」に対応する力である。授業実践でも、計画通りにいかないときに、臨機応変に進めていくということが苦手であった。また、児童の予想外な言動への対応や不適切な言動への指導については、まだ担任として実践していける自信がない。今後も学校現場では、児童と様々な場面で積極的に関わることを大切にする。さらに、専門的な知識の習得に努めることを通して、自信を持って指導ができる教員になる。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童に寄り添った授業づくりと学級経営」**

受講生氏名：谷口 翔一

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

「授業づくり」と「学級経営」は、どちらも切り離して考えることができない大切な要素である。これは、教師力養成講座を受講する以前での教育実習や学生ボランティアで感じていたことだ。そこで、この演習を通して先生方がどのようにして児童と関わりながら授業づくりや学級経営を行っておられるかを観察するだけでなく、私自身が児童に寄り添い、授業づくりや学級経営について研究したいと考え、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 各学級での担任と児童の関わり方や授業の観察
- イ 指導補助や休み時間を通した児童との関わりによる省察
- ウ 授業実践による省察や実践に対する教職員からの指導

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期では高学年、後期では低学年と発達段階の異なった学年で演習に取り組んだ。学級では、担任と児童との授業の内外での関わり方の違いや指示、発問の工夫などを観察した。観察だけでなく、積極的に児童と関わることで児童理解に努めた。演習での体験授業や研究授業では、どのように工夫すれば主体的に取り組めるのか、思考を深めることができるのか等を考え、日常生活や体験と結び付けた授業づくりを心がけた。

(2) 演習校で学んだこと

ア 授業について

授業を行ううえで、教材研究等の準備が重要だと感じた。準備をすることで教師は、余裕をもって児童を見取ることができる。一人一人の児童を見取り、適した発問や指示をすることで児童の考えがより深まりやすくなると感じられた。また、活動を取り入れることで児童が積極的に授業に参加でき、より主体的・対話的で深い学びが実践しやすくなる。そして、このような学びをさらに深めるためには、日常生活と関連づけることが大切だと学んだ。

イ 生徒指導について

演習後期は、低学年の学級で演習を行い、その際に児童間のトラブルに対する指導を経験した。そこで、児童に寄り添って両者の主張を聞き、教師は中立の立場になることの大切さを学んだ。偏った主張だけで物事を判断してしまうと児童だけでなく保護者からの信用まで失ってしまう恐れがあるのご指導いただいた。小さなトラブルを見逃さず、一人一人の児童と真摯に向き合って、落ち着いて両者の主張を聞き、中立の立場になって指導を行うことが大切だと経験を通して学ぶことができた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、希望校種に関わらず、教員を志望するにあたって身に付けておきたい知識や教育課題、様々な教育実践について学ぶことができた。また、学びから互いの考えを共有することで、自らの学びを深めるだけでなく異なった考えを吸収することができた。

その中でも特に第13回のICTを活用した授業実践に関する講義が印象に残っている。ICTを手段としてどのように活用すればよいのか考えたことが、児童に寄り添った「分かる授業」を展開することを強く意識するきっかけとなった。授業実践において、児童が積極的に授業に参加するために、ICTを効果的に活用することを意識して臨むことができた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座で身に付けた力や成長したことは、大きく分けて2つあり、1つ目は、授業力である。特に教材研究について、これまで以上に考えて取り組むようになった。教科書や学習指導要領を研究し、児童に身に付けさせたい力は何なのか、そのためにどのような指導の工夫をすればよいのかなどを繰り返し熟考した。導入でのひきつけ方、発問の工夫、的確な指示、道徳であれば揺さぶり等を意識して教材研究に励んだ。すると、これまでは拾うことができなかった児童の表情やつぶやきが拾えるようになった。児童に寄り添って授業づくりを行うことで、「児童が生き生きと取り組む授業」を展開することができたため、授業力は向上したと考える。

2つ目は、児童や先生方とつながる力である。授業を考えるにあたって、児童のことを理解することは、重要なことである。そこで、休み時間等の生徒指導の時間を活用して、児童と積極的に関わることを意識して行った。児童の興味あるものを尋ねたり、一緒に遊んだりして関係性を深めることで学級の児童の理解を深めていくことができた。また、自分から見た児童の姿にとどめることなく、学級担任から見た児童の姿を知ることによって多様な見方から授業づくりを行うことができた。このような点から、児童や先生方とつながる力が身に付いたと感じた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座での4カ月間の学びを通して、より一層小学校教員を志望する思いが強くなった。短い期間であったが、先生方の学び続ける姿勢を見ることができたり、講座を通して様々な知識や考え方を学んだりすることができた。そして何よりも、4カ月間での児童の成長を見ることができ、教職の良さを実感することができた。これからも児童とともに学び続けられる教員になりたいという思いを再確認することができた。

(2) 今後の課題

実践を経て痛感したことは、引き出しの少なさである。先生方の授業を拝見した際に、自分では思いつかないような指導の工夫や言葉選び等、1つのことに対するいくつもの引き出しが見られた。様々な経験や学びから得た引き出しを適切に活用することができるよう、日頃から学びの姿勢をもって自己研鑽に励む。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人の自立を促す教師の指導方法」**

受講生氏名：高橋 胡桃

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教育実習や教員養成サポートセミナーでは、支援を要する児童への支援と授業の進め方をテーマに演習に取り組んだ。その中で支援を要する児童もそれ以外の児童も全ての児童が一体となって授業に取り組んでいることを学んだ。そこで、全児童へ対象を広げて学校教育の目標ともいえる「自立」につなげる指導方法を学び実践したいと考え、本演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 担任教諭の授業や生徒指導における言葉かけの観察
- イ 担任教諭の指導の意図を中心とした質問
- ウ 体験授業や研究授業における自立を促す言葉かけの実践

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

まずは児童の名前を呼び挨拶をして対話につなげたり、休み時間に遊んだりして児童理解を深めた。授業支援では児童の意志で表現できるよう言葉を引き出す言葉かけを行った。

また、前期後期ともに担当学年全ての学級で授業実践を行った。実践後すぐ振り返りを行って成果と課題を整理し、次の授業で何を改善するかを明確にして実践することを繰り返した。授業観察で学んだことを活かし、具体的な言葉で褒めることも実践した。

(2) 演習校で学んだこと

児童が自ら考えて行動するには、やりたいという気持ちや、課題をやる必要性を理解していることが土台にあることを学んだ。そこで次の視点から述べる。

ア 児童の自立を促す「言葉かけ」

児童の良い言動に加え「当たり前」ができている時にも褒めると、児童は教師が見てくれていることを感じ取って頑張る意欲につながる。また指導する場合も含めて粘り強く何度も言うことで、少しずつ意識が変わり行動へとつながる。その他、あえて言葉かけをせず沈黙をつくって、児童自身が考え気づく時間を与えることも重要である。児童の様子を理解して言葉かけを変えていくことが求められる。

イ 児童の自立を促す「授業」

学級には常に学級の小さな目標があり、それを達成するという循環を大切にしていた。具体的に、百マス計算の正解数で基準を超えたら席替えをするなどの目標を設けて、児童の頑張る意欲を引き出ししていた。特に中学年では6年生を送る会の後に行事がないため、目標達成の喜びを共有して頑張る意欲が継続できる環境を整えていた。

また、低・中学年の児童は教師による説明よりも実演によって、新しい発見や体験につながり、児童のやりたいという気持ちを引き出すことができた。

ウ 児童の自立を促す「行事」

6年生には、入学式や1年生を迎える会で教室への誘導など下級生への支援の機会を与えていた。上級生としての自覚を芽生えさせることができ、その後の体力測定の協働や読み聞かせ等の下級生との関わりや支援への活発化につながっていた。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教師になる上で疑問や不安に感じる内容、教育時事、京都府の教育施策等、幅広い分野にわたって知識や学校現場での活用方法を身に付けることができた。

なかでも第8回「特別の教科 道徳」の講義が特に印象に残っている。道徳教育は道徳の授業だけで行うものではなく、思ったことを言い合える学級経営や1日1日の指導の積み重ねが重要であることを学んだ。児童の思いに常日頃から向き合い児童の実態を理解し、それを基にして考える授業や学級経営を大切にしていきたい。授業と学級経営は一体である意識をもって取り組む大切さを学んだ。

また講義での演習生同士の話し合い活動で、多様な考え方に触れたり様々な場面を想定した対応を考えたりして学びをさらに深めることができた。学校現場においても同僚間での話し合いの機会を大切にしていきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

講義での話し合いやレポート、演習後の日誌や話し合いにおける学びを次の演習ですぐ実践する習慣を身に付けることができた。この「学びから実践へ」を今後も一体的に行う。

(1) 児童への言葉かけ

演習では児童の心に響く褒め方を身に付けることができた。演習前までは机間指導等で個々に褒めていたが、本演習では「話を聞く姿勢ができている人は目が合います」など学級全体の前で個々の良さを褒めることができた。低・中学年の場合、一部の児童の行動を褒めると、他の児童もやろうという気持ちになり行動の変化につなげることができた。「前を向きましょう」という指摘でも行動は変わるが、褒められる方がやろうという気持ちが高まりやすいことを実感し習得することができた。また教師が見てくれていることを児童が感じ取れるように、良いところを具体的に褒める力も身に付けることができた。

そして児童の思いを引き出す言葉かけの重要性にも気づき実践できるようになった。図画工作の授業で「これは何を作っているの？」や困っている児童には「どうしたの？」など児童の話の聴く言葉かけで、常に児童の思いに寄り添う姿勢を身に付けることができた。

(2) 様々な人と関わり合ってさらに学びを深める姿勢

「夢・未来」講座での演習生同士の話し合いや、授業実践前の模擬授業及び事後指導での演習生や担任教諭、指導教員、管理職の先生方から助言をいただいて学びを深める機会が非常に多かった。児童側から見た視点は授業実践と並行していると見落とす部分がまだ多くあることからとても貴重な機会であった。自身の考えと他者から見えた視点をうまく融合して新しい考えを生み出すことに喜びを感じながら行えたことが成長した点である。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教職は児童や他の教職員と学び合いながら取り組むこと、また児童のために尽力する教師のやりがいを実感し、自分も学び続ける教員でありたいという思いが強くなった。本演習では、演習のオリエンテーション時の校長先生の言葉「指導が児童にどう届いたかが重要」について担任教諭や指導教諭から助言をいただきながら考えを深めて実践した。教師になる上での基本姿勢であると実感し、児童の姿から考え続ける教員を目指す。

(2) 今後の課題

今後の課題は、学級全体を見る力である。学級経営や教科指導は常に30人程度の児童がいる中で指導する必要がある。個々の児童のつぶやきを拾いつつ学級全体で学びを深めながら進めていきたい。まずは列や班ごとに児童の様子を見て取ったりICTも活用したりしながら、段階的に少数から全体へと視野を広げて力を付けていきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童一人一人が居場所を感じ、安心できる学級経営」**

受講生氏名：大橋 昂河

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、児童に学校を好きになってもらいたいという思いがある。そのために、児童一人一人が居場所を感じ、安心できる学級を作りたいと考えている。児童が学級に居場所を感じ、安心できることは学習活動や学校生活における基盤となると考えたためである。

また、教育実習やサポートセミナー等で様々な背景を持つ児童と関わってきた。その際に、居場所があり安心できる学級の大切さを感じた。そのため、今回の演習では学級経営を行う際に、どのように児童と関わり、どのような工夫があるのかを具体的に学びたいと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア 担任の児童への言葉かけや指導方法の観察。

イ 担任や指導教員などをはじめとする先生方への聞き取り。

ウ 体験授業や研究授業、休み時間の活動における実践と考察。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前半は4年生、後半は2年生の学級で演習に取り組んだ。担任がどのように児童と関わり、どのような指導を行っているのか観察した。授業以外にも休み時間の関わりや給食の時間の関わりなど、先生がどのような点に留意しながら児童と接しているのかを質問し学級経営について学んだ。さらに、担任の先生から児童の特性を教えていただき、それぞれの特性を持つ児童にあった接し方をすることを心がけた。

また、積極的に児童とコミュニケーションをとり児童理解に努めた。児童の努力している姿を褒めたり、休み時間に児童と一緒に遊んだりすることで信頼関係を築いた。児童が居場所を感じ安心できるためには、教師との信頼関係が重要になると考えたため、積極的にコミュニケーションをとった。

(2) 演習校で学んだこと

ア 安心して生活できる環境づくり

担任は、率先して廊下に落ちているゴミを拾ったり、トイレのスリッパを揃えたり、児童が帰った後に教室の掃除を行っておられた。些細なことだが、小さな乱れが大きな乱れとなる。児童にとって安心できる場であるために普段の生活から環境を整えておくことの重要性を学んだ。

イ 児童との信頼関係

児童は担任のことを信頼している様子だった。それは、普段から担任が積極的に児童と関わり児童の話をしっかりと受け止めて聞いているからだと感じた。信頼関係ができているからこそ、担任が児童に厳しく指導した際も、反発することなく素直に担任の指導を受けていた。児童が居場所を感じ、安心できる学級をつくるうえで、教師と児童との信頼関係は重要であると学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育施策やその現状、どのような力が児童に必要なのかなど、学校現場で求められる教員の力について多面的に学ぶことができた。また、他の演習生と議論をすることで良い刺激になり、様々な考え方に触れることができ学びが多くあった。

特に、第10回の講義が印象に残った。「主体的・対話的で深い学び」に関する内容で、具体的な実践例をもとに考えることができた。このような学びを実践していくにあたり、児童が安心してクラス内で発表できる場やクラスメイトに自分の発表を聞いてもらえる環境が土台として必要であることを学んだ。自分の意見を受け止めてもらえる環境をつくることは、主体的・対話的で深い学びが実践できることと同時に、安心できる学級づくりにも関連していると感じた。自分の意見を受け入れてもらえることで、児童は自信が持てるようになる。これが学級に対する居場所感や安心につながる。このことから、授業と学級経営は密接に関連していると学んだ。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童とのコミュニケーション・褒める力

今回の演習では、児童と積極的に関わることを目標とした。積極的に話しかけてくれる児童はもちろんのこと、なかなか話しかけてこない児童にも私から話しかけるようにした。すると、何日かたつと児童が心を開いてくれるのが分かった。児童との関わりが増えるにつれて児童理解が深まり、新しい一面を知ることができた。

また、「褒める力」が身に付いた。先生方から褒めることを意識すると良いというアドバイスをいただいた。児童が努力している姿や学習の成果などを褒めることで、児童の自己肯定感を育むことができた。そのためには、日頃から児童とよく関わり、児童の様子をよく観察しておく必要があると学んだ。このように、積極的にコミュニケーションをとり児童の様子を観察する力や褒める力が身に付いた。

(2) 児童の実態にあった授業づくり

児童の実態に応じて授業をつくることを意識した。これまでの校外学習で学んだことを授業の導入に用いた。児童は興味をもって授業に取り組んでいた様子だった。また、調べた内容をまとめて班で発表する活動をこれまで熱心に取り組んでいたため、そのような活動を授業に取り入れた。

また、4年生と2年生で授業を行ったが、児童に対する話し方を工夫した。2年生に対しては、指示や話し方をより細かく丁寧に行った。このように学年や児童の学習内容に応じた授業をすることができた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、教職のすばらしさや大変さを実感することができた。大変な部分はあるが、児童が一生懸命に取り組む姿や元気よく遊んでいる姿を見ると、教職のやりがいを感じることができる。児童に学校を好きになってもらえるように、よりよい学校生活を送ってもらえるように、日々授業力の向上や学級経営のスキルの向上に努めていく。また、児童とコミュニケーションを積極的にとり信頼関係を築いていけるようにする。

(2) 今後の課題

今後の課題は、個に応じた指導である。授業内容を理解できていない児童がいたときに、どのように対応していくかが難しいと感じた。児童一人一人が個別最適な学びを行うためにはどのように指導するのかを考えていく必要があると感じた。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童が自発的に参加する授業づくり」**

受講生氏名：上治 来夢

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

教員になるためには、授業づくりの上達が必須である。大学の教育実習での授業実践の中で、教員が一方的に教える授業になってしまったという経験がある。また、公立学校インターンシップで授業観察をさせて頂いた際に児童がとてもワクワクしており、「学びたい」という意欲が見られた。児童が自ら学びたいと思うことは、児童の学力向上に直結すると考えている。将来教員になった時にクラスの児童に「学ぶことが楽しい、もっと学びたい」と思ってもらいたいと思い、今回の演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 学年の全クラスで授業観察を行い、どのような発問、声掛けが効果的か学ぶ。
- イ 積極的に児童と関わり、個々に合わせた指導が行えるようにする。
- ウ 観察をして学んだことを元に、体験授業や研究授業の中で実践する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

配属学校では、第1学年と第4学年の全学級に入らせていただき、それぞれの学級の雰囲気や、児童の実態が異なることが分かった。第1学年の道徳の授業では、授業についていけないことが自発性を失ってしまう原因だと考え、挿絵を効果的に使ったり、登場人物のセリフを児童に言わせたりなどを通して、意識して物語の内容を把握させたりした。その結果、「私もやりたい」と意欲的に全員が参加できる授業を行うことができた。同じく第1学年の算数の授業では、あえて正解を言わない方がいいという先生方のアドバイスをもらい、児童に考えさせる活動を多く取り入れた。第4学年の道徳の授業では、対話型の授業を行い、児童の発言を更に深掘りしていくということを行った。すると、挙手して考えを発表する児童が増えた。

(2) 演習校で学んだこと

ア 他者との交流について

自分の考えを他者に聞いてもらい、交流をし、自分とは違った価値観を取り入れることで、「こんな意見もあるのだ」と自分の考えを客観視することができ、それが学習意欲に繋がるということが分かった。しかし、ペアワークやグループワークをすることは、とても大事であるが、中には、なかなか話し合えない児童もいる。そのような児童には、教師が声を掛け、適切な支援を行うことで話し合いができていた。教師は常に児童一人一人を理解し、個に応じた指導や支援を行っていかねばならないと感じた。

イ 児童が学びやすい環境を整える

演習学級では、児童の学習の小さな壁を無くすという活動をされていた。問題に悩んでいる児童がいれば、悩んでいる原因を見つけ、対策をされていた。例えば、一度に多くの情報を処理することが苦手な児童に、算数の筆算が予め書かれているワークシートを個別に手渡されると、児童がスラスラと取り組む姿が見られた。普段から児童の様子をよく観察し、その児童の実態に合った指導をしていく必要があるとわかった。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、ICT活用や道德教育、英語教育や京都府の教育についてなど、教育に携わる様々なことを学べた。私はその中でも英語教育について学んだ際に「思わず話したくなる発問」を実感したことが印象的である。自分の生活に関連付けたことの発問であったため、知りたいと思い、話し合いの指示の前に、つい隣同士で確認をする場面があった。その時に児童が主体的に学習を行う動機付けはこのように児童自身が知りたいと感じる事が大切なのだとわかった。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業実践において

演習校では、たくさんの授業実践の経験をさせて頂いた。1回目の授業では指導案を作成し、自信を持って教壇に立っても、「教える」ということばかりが先行してしまい、児童主体の授業を行うことが出来なかった。授業を重ねるごとに、この授業では何を教えたいのかという軸を定め、それに合わせた児童の活動内容を設定した。児童とのコミュニケーションの中で授業を進め、予想外の回答に対しても、全員への問いかけに派生させていくことで考えを深めるという授業を行うことが出来た。教室の中でついてこれない児童や集中していない児童がいないか確認しながら授業を行うことはとても難しいことではあったが、視野を広くするという力を身に付けることができた。

(2) 教員の業務について

学年の全学級で演習に取り組んだことで、先生方の授業の進め方や学級経営の仕方などに様々な特徴があることがわかった。ICT活用が教員の業務の短縮に繋がったり、教材を準備して児童が楽しく学べる環境を作ったりする、工夫をたくさん知った。その中で、自分の先入観や固定観念で物事を判断せず、多方面から考えていく必要があると感じた。時代が変化していくと共に目の前にいる児童も変化していくため、教員は絶えず学び続けていく職業であると改めて実感した。また、卒業式や始業式など節目となる行事に参加させて頂き、教員としてどのような行動をしていく必要があるのかを自分の目で見て学ぶことができた。

(3) 児童との適切な距離感について

学級経営を行う上で、児童一人一人を理解していくことが大切であると演習を通して感じた。演習をする前は、児童に嫌われることを恐れ、厳しく注意をすることができなかった。しかし、今では、児童の安全と安心を第一に考え、その場に合ったメリハリのある指導を行うことができる。また、授業以外でもその児童の得意・不得意を見つけることで、より個別最適な学びに繋げることができると学んだ。低学年と高学年では、声掛けや指導方法などにも違いがあるが、どの学年でも共通して言えることは、児童が主体となって物事を進めているということだった。児童を深く知るために教員から積極的に声掛けを行い、信頼関係の構築をしていくことが大切であると身をもって感じた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

教師力養成講座を通して、教員になりたいという思いがさらに強くなったと同時に、思いだけでは務まらないということも実感した。学級経営を行う上で大切なことや、地域や保護者との関わりで気を付けなければならないことなど、教員にとって必要な資質や能力は果てしなくある。その中でも、自分の中で一番強い思いである「子どもを第一に考える」ということを忘れずに業務をこなしていきたい。ICT活用など、進化し続けなければならないことも多いが、何事もポジティブに捉え、教員の働き方改革などに生かしていきたいと考える。そのためには、常に学びを続け、どんな変化にも柔軟に対応できる人間でありたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「授業づくりと学級経営の関連」**

受講生氏名：下村 優月

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

先生は、学級で授業をすることの他に学級経営も行なっている。日々の学級経営での信頼関係の構築により、授業が活性化している。本講座では、長い期間演習が行えるため、自分の研究授業や体験授業の際にも児童との信頼関係を構築し、授業に挑みたいと考えた。そのために、先生の学級経営を観察し、それらが授業にどのように影響を及ぼしているのかを学びたいと考えた。学級経営をどのように授業づくりに活かしているのかを学びたい。

(2) 研究方法

学級を観察し、担当学年の先生が学級経営をどのように行なっているのかを学び、授業での活用方法（児童の積極性、学ぶ態度等）についても観察を行った。また、放課後等に先生へ授業づくりで意識していることを伺い、学んだ。自分自身も授業をする学級で積極的に関わりを持ち、児童の実態を把握した上で授業づくりを行った。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

学級経営について、前期では年度末の2年生、後期では年度始めの5年生の学級に入り、担任の先生の学級経営について学んだ。演習では、学習指導だけでなく、生徒指導も行ったため、児童と密接な関わりを持つことができた。2年生では、児童が主体的に動くことができるような働きかけがされていた。例えば、ベル着を全員ができるとポイントが貯まり、目標の半分達成で宿題なし、目標達成でお楽しみ会が開催されるというものであった。このような児童にとって明確な目標が掲げられていると、児童も目標達成のために、主体的に声かけを行ったり、行動したりするようになる。このような学級経営により、低学年である2年生の学級には、主体的に行動する姿や、まとまりのある様子が見られた。児童が主体的に行動し、まとまりのある学級では、授業でも主体的に考えを発表する姿や積極的に授業に参加する姿が見られた。5年生では、授業や学校生活の学級全体でのルールがしっかりと決められており、児童はルールに沿って日々の生活を送っていた。児童は、ルールに基づいて行動することで、一人ひとりが責任を持って行動することができていた。どちらの学年でも、担任の先生の学級経営について観察を行ったり、担任の先生へのインタビューに行ったりすることで、その学級についてよく学んだ。学級経営に合った関わり方を行い、積極的に児童とコミュニケーションを取ることで、信頼関係を築くことができた。その学級に合った学級経営を行い、児童と信頼関係ができていると、授業への積極的な参加が見られることを授業実践を通して学んだ。

演習校で学んだことは、さまざまな行事の参加から学年の壁を超えた縦のつながりの重要性や広い視野を持った児童への関わりである。年度替わりのさまざまな行事や体力テストへの参加から、高学年が中学年や低学年のお手本となるような行動を取ることで相乗効果が生まれることを学んだ。体力テストでは、高学年が低学年に教えることで、高学年は自己有用感を実感できる取組となることを学んだ。

演習校では、さまざまな学年を担当するだけでなく、同じ学年の全学級（3学級）を担当した。多くの児童との関わりとなるため、広い視野を持って関わるのが大事であると学んだ。また、学級の中でも広い視野を持った関わりが大事であるということも学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、各分野に特化した講義を受け、知識を定着させることだけでなく、授業への活用法について学ぶことができた。また、教育長や現場で活躍する先生方から、「教師のやりがい・使命」、京都府教育振興プランについてお話を聞き、教師という仕事について、教師としての自覚を持つことで児童にとって効果的な関わり方ができることを学んだ。私が教師の使命として学んだことは、児童生徒の求める出会いを提供することである。児童は、学校生活など日々の生活の中で、いろいろな出会いを求めている。人との出会いはもちろん、学びの出会い等も教師が出会う機会を与えることが重要である。また、児童理解と学級経営についても学び、児童理解をするためには、学級経営の充実を図ることが重要である。各分野の講義では、どのような社会背景があり、どのような指導法がそれぞれの児童に合うのかを学ぶことができた。児童に何かの力をつけさせるために、ICT教育を活用したり、授業に工夫をもたせたりすることが大事であるということを学んだ。力をつけさせるための手段として、私たち教師が学び、実践に活かしていくことが大事である。また、今の変化の激しい時代に沿った教育観や「令和の日本型学校教育」についても現状や課題とともに学ぶ機会となった。各講義では、演習生同士でテーマに沿った協議も行ったため、意見交流の中で、さまざまな教育に対する考え方を聞くことができた。自分にはなかった考え方を聞くことができ、これからの実践方法を学ぶことができた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

教師力養成講座では、現在の教育課題や学校現場に合わせた指導の実践力を身に付けることができた。「夢・未来」講座では、さまざまな分野の教育課題や実践方法について学んだ。演習校での実習の中で、課題に直面した時に、講座で得た学びを活かして行動することができた。講義やグループ協議の中で、自分ならどうするかを常に考えることができていたため、それらを学校現場で発揮することができた。また、児童に合わせた授業実践力を身に付けることができた。長い期間の関わりの中で、学級の児童を理解し、それをもとに授業づくりを行った。そうすることで、授業づくりでは、学級の雰囲気や個別最適な方法に合わせて授業に工夫をもたすことができるようになった。児童の成長や理解度に合わせた授業づくりを行うことで、授業では児童の積極性や学びに向かう姿勢を感じることができた。授業実践から、児童にとって学ぶことが楽しいと思える発問の工夫や生活と結びついた内容を導入では行うことなどの重要性について学んだ。授業実践を重ねていき、前回の課題点を活かすことで、より児童に向き合った授業づくりが行えるようになった。最後に、教師力養成講座では、全体を通して人とつながる力を身につけることができた。「夢・未来」講座では、グループ協議を行う中で、京都府の教員を目指す同じ仲間としてつながることができ、さまざまな意見交流を行うことができた。また、演習校では、指導教員、担任の先生、管理職の先生方から学校や学級について多くのことを学ばせて頂いた。自分が学んだことを先生方と共有しアドバイスをしていただくことで、より具体的な活用方法を身に付けることができた。多様な人とつながる力を自分自身も身につけることができた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

これまでの学びや経験から、私は考えぬく力を大切にしていきたい。児童の行動や発言等に対して、「なぜ？」という自問自答を常に行っていく姿勢を大切にしたい。考えぬく力を身につけることで、児童理解が深まり、より良い児童との信頼関係が構築されていくと考える。また、自分自身でも、日々の教員生活の中で、小さなことに気づき、考えぬく姿勢を大切にしていきたい。また、変化の激しい時代にあって、自分一人で解決しようとせず、教師力養成講座で身に付けた人とつながる力を活用し、チーム学校の一員として動いていきたい。学校という場所で、児童が信頼できる存在でありたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「自己肯定感を育む指導や支援」

受講生氏名：西田 隆哉

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

現在、日本人の自己肯定感の低さが問題になっている。自己肯定感の向上は、学力向上や社会的自立に大きな影響を与える。自己肯定感を高めることはとても重要である。授業や学級経営を通して、児童の自己肯定感を育みたい。児童の自己肯定感を育む指導や支援をするためにはどうしたらよいのかを研究したいと思い、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 配属学級において、担任の先生の指導方法や児童への声掛けの工夫を観察
- イ 体験授業や研究授業における実践と考察

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第1学年、後期は第4学年で演習をさせていただいた。授業では、児童が楽しんで学習に取り組めるような工夫を行い、学習意欲を高められるように努めた。机間指導では、些細なことでも児童が頑張っていることに気づき、肯定的な声掛けを行うようにした。

(2) 演習校で学んだこと

ア 一人の児童を褒めることでの相乗効果

褒められるというのは誰しもが嬉しいと思うものである。一人の児童が良い行いをした際にクラス全員の耳に届くように褒めることで、他の児童たちが「私も褒められたい」「〇〇さんに負けたくない」などと思い、意欲的に学習に取り組む様子が見られた。また、褒められることで自信を持ち、授業内で挙手して発言する児童が増える。教師の声掛けが児童に大きな影響を与えることを改めて実感することができ、児童に対する発言に注意する必要があると感じた。

イ 指示や説明の簡潔化

授業を行ったり授業を観察したりする中で、指示や説明の重要性に気付くことができた。指示や説明は、児童が学習内容を理解したり授業をスムーズに進めたりするために重要なことだと学んだ。しかし、ただ指示や説明をすればいいわけではない。長すぎたり多すぎたりする指示や説明だと理解するのが難しくなる。指示や説明は簡潔に分かりやすく行うことが重要であり、教師が教材研究をきちんと行い、学習内容を理解する必要があると学んだ。

ウ 児童との関係づくり

指導や支援を行う上で、児童と良い関係を築くことはとても大事なことだと学んだ。演習の1ヶ月目は上手く児童たちと関わるができず、授業や机間指導もうまく行うことができなかった。担任の先生のアドバイスをいただき、受け身になってしまっていた気持ちを改善すると児童たちと上手く関わることができ、授業でも挙手してくれる児童が増えた。児童と良い関係を築いていくためには、自分から積極的に児童たちに関わっていくことが大事だと学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教員として身に付けるべき資質・能力、現在や今後の教育課題について学ぶことができた。その中で、特に印象に残っている講義が2つある。

(1) 道徳教育について

道徳は他の教科と違う点が多々ある。道徳は数字で評価はせず、認め・励ます文章評価をするので、児童一人一人に肯定的な声掛けを行うことが大事だと学んだ。道徳は共に考え、学んでいくものなので、児童が考える時間や発言する機会をできるだけ多く取れるようにしていく。また、思ったことを自由に出し合うことのできる環境づくりをしていく。難しい題材を扱う場合、教師の説明が多く教師主体の授業になってしまいがちだが、教師と児童が共に考え、学ぶことを意識して授業づくりを行っていききたい。

(2) 特別支援教育について

特別支援教育において、「選択肢を与える」ことの重要性を学ぶことができた。障害の有無を問わず、できるだけ同じ場で共に学ぶためには、一つのやり方に縛られないことが重要だと感じた。子どもによって得意・不得意が違うのは当然であり、特別な支援を必要としている子どもだけに選択肢を与えてしまうと、特別扱いされていると捉えてしまい、自尊心を傷つけてしまう可能性がある。すべての子どもが共に学ぶために、学習の進め方を一つにせず、全員にいくつか選択肢を与えながら学習を進められるようにしていきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

演習で授業を行い、少しずつだが授業力をつけることができた。授業を行うごとに事後研で出た改善点を意識しながら次の授業に臨んでいった。そうすることで、児童が「分かった」「できた」と実感できる授業に近づいていっていると感じた。また、児童の学習意欲を高めるために教具を用意することで、児童と共に楽しんで授業を行うことができ、児童主体の授業を考えることができるようになった。

(2) 児童理解

児童に対して自分から積極的に関わることができるようになった。以前は、児童の方から話しかけてくれて関係を築いていくことばかりだったが、児童から話しかけてこない場合でも自分から積極的に話しかけにいった関係を築いていくことができた。児童たちと関係が築けているからこそ、授業で積極的に発言したり、机間指導で適切な支援ができたりするのだと感じた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、改めて教員はとても魅力的な職業だと感じた。年度末作業など大変なことも経験したが、児童が楽しんで授業を受けてくれる姿を見て、やりがいを感じることができた。児童の学習意欲をいかに高められるか、楽しいと思える授業をつくれるかを考えていく。児童の成長を1番に考え、学び続ける教員になりたい。

(2) 今後の課題

今後の課題は、「授業力」である。少しずつ成長できているがまだまだ未熟だと実感している。特に時間配分に課題が残る。この授業で1番時間を使って考えさせたいところを見極め、時間配分できるようにしたい。また、個別で考える時間やグループで調べ学習をする時間をあらかじめ決めてタイマーを設定しておくことで、学習の見通しをもたせたり時間通りに授業を進められたりできるようにしていきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童のつまずきから理解を深める学習指導」**

受講生氏名：松原 加奈

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、誰でも苦手な教科や分野が存在するのは当然のことと考えており、京都府教員養成サポートセミナーにおいて「学習に対して苦手意識を持つ児童への学習指導」を研究テーマとして設定し研究を行った。これまでは、つまずきは無くすものであると考えていたが、この研究からつまずきから児童が学ぶことが多く、決してつまずきは無くさなければならないものではないのではないかと考えた。そのため、本研究では、児童のつまずきから教師はどのように深い学びへと繋げているのか研究したいと考え、この研究テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 授業観察を通して、児童のつまずきに対する教師の学習指導を観察する。
- イ 体験授業や研究授業で、つまずきへの学習指導の実践と考察を行う

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第6学年、後期では第2学年の学級に入り、演習をさせていただいた。授業観察では、教師がどのように児童のつまずきを深い学びに繋げているのか観察記録をつけた。授業実践では、演習学級以外の学級でも授業させていただき、発達段階の違いによるつまずきへの指導方法や各学級の児童の実態に合わせた授業の進め方を理解し、実践するよう努めた。教科横断的な視点を取り入れることで学びの振り返りを行ったり、児童がつまずきやすい箇所を事前に予測し、実際につまずきが見られた時の指導方法を考えて深い学びに繋がられるような工夫を行ったりした。

(2) 演習校で学んだこと

ア ペアやグループワークでの児童の学び合い

学習につまずいている児童を一斉指導のみで理解を深められるよう指導することは難しい。そのため、ペアやグループワークを効果的に取り入れることで、つまずいている児童も自分にはない新しい意見を発見することができ、またつまずいている児童を助けた児童も自分の意見を相手に説明することを通してより学習理解を深めることに繋がることを学んだ。また、自分が分からないということを分からないと言える環境づくりも大切であり、そのためにも教師は「分からないことは〇〇だけじゃないよ。」と声かけを行い、児童自身を安心させてあげることやできた時にはきちんと褒めることも大切だと学んだ。

イ ICTの活用

道徳の授業など、今は何について考える時間なのかはつきり指示を出すことが必要である。そのために、ICTを用いて発問を可視化することで、何を聞かれているのか分からなくなるというつまずきへの対処を行うことができることを学んだ。また、自分の考えを書いたり問題を解いたりする時に、どのようなことを書くのかどのように問題を解くのか分からないというつまずきが想定されたため、児童が自力で考える時間を設けた後にヒントカードやいくつかの例を提示することで考えやすくなることを学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、さまざまな講師の方から講義を受け、京都府の教育や教師として必要な知識を学ぶことができた。また、違う演習校や校種で同じ夢を持つ仲間と共にペアやグループワークを行ったことで、違う意見から新しい発見をすることができ、自分の視野を広げることができたと感じる。

特に印象に残っているのは、第8回の「特別の教科 道徳」の講座である。この講座の中で「みんなの心はダイヤモンド」という言葉が強く心に残っており、学級全員で思ったことを出し合っ心で長い期間をかけて磨いていくことで、少しずつ児童の心を育てることに繋がることを学んだ。また、正解がないからこそ、児童一人ひとりの意見を肯定的に受け止め、教材の価値に迫ったり、本当にそうなのか立ち止まって考えたりするためにも揺さぶりの発問を行うことが改めて大切だと学ぶことができた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

初めて児童に向けて授業実践を行った教育実習では、とても緊張してしまい、指導案通りに進めることが精一杯だった。しかし、教師力養成講座を通して児童の前に立つ機会を増やしたことによって、授業中の児童の理解度や実態に合わせて臨機応変に対応することができるようになったと感じる。また、演習学級以外の学級で授業をさせていただいたことにより、学級によって児童の実態や雰囲気、つまり箇所が違うことを学ぶことができたため、授業構想を立てる時には、学級ごとの児童の実態を理解し、つまずきの予測をより徹底して行い、教材研究を進めていくことが大切だと学んだ。

(2) 積極性

教育実習や京都府教員養成サポートセミナーでは、なかなか思うように行動できず、より積極的に行動することを目標としていた。そのため、自分から授業する機会をより多くできるよう担任の先生に相談したり、自ら宿題の丸つけや困っている児童に積極的に机間指導で話しかけたりすることによって、結果として授業実践を7回、学級担任代行経験を16回させていただくことができた。また、宿題の丸つけなどを通して児童のつまずきを見つけることができ、どの児童がつまずいているのかに気づく力も同時に身につけることができたと感じる。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

長期間児童と関わる機会を設けることができたことにより、児童の大きな成長を間近で見ることができた。また、教師自身が自ら学び続ける姿勢を持っていることが児童にとっても大きな影響を与えることを実感することもでき、これは私が掲げている「児童と共に成長していくことができる」という理想の教師像に当てはまると感じた。そして、この児童の成長こそが教師としてのやりがいにつながっていくことも実感することができ、より教師という仕事に魅力を感じた。児童の可能性を信じ、児童のために学び続ける教師を目指していきたい。

(2) 今後の課題

今後は、授業の最終的なゴールの姿を見越した授業づくりと指導するところと見守るところの区別をつけることを特に重視していきたい。授業や単元の終わりに児童にどのような姿になってほしいのかしっかりと考え、授業づくりを行っていきたい。また、児童のつまずきを全て教師が指導するのではなく、理解を深めたり、児童同士で学び合ったりする機会であることを理解し、見守りながら指導を行っていきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童が主体的に学びを深められる学級経営」**

受講生氏名：田中 隼平

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

私は、これまで教育実習やボランティア等を通して多様な児童との関わりの機会をいただき、数多くの学びを得た。その中で、児童自身が学習や役割に対する興味や関心を持ち、主体的に学びたいと思えるような学級作りをすることが重要であると考えた。

そこで、大半の時間を学級という場で過ごしていく児童に対して、担任の先生がどのような声掛けや工夫をされ、児童が主体的に学びを深めることができる学級経営をされておられるのかを学ばせていただきたいと願い、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア 授業内や休み時間等における担任が行っておられる取組や声掛けを観察させていただき、その学びを自身も実践する。

イ 体験授業や研究授業等の授業実践や机間指導から児童の反応を観察し、考察する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期の演習では第5学年、後期の演習では第1学年の学級で演習をさせていただき、学年や児童によって掲示物に関わる工夫等の学級経営の仕方が異なることや、学級担任の児童一人ひとりの状態に合わせた関わり方について観察し、実践を通して学びを深め続けた。

主に授業実践や休み時間を通して、積極的に児童と関わる中で主体性を大切にする環境づくりを心がけた。その際、「本当に今の声掛けで児童が主体的になったのか。」を考察し実践することで、児童自身が思考を働かせ、次からは自ら行動に移すことができるような関わりを心がけた。

(2) 演習校で学んだこと

ア 授業について

学級担任は分からない児童に合わせて授業を展開しておられた。具体的には、個人活動からペア学習を通して、全体へと共有するという流れで授業を展開しておられた。ペアやグループ学習等の児童同士が対話する時間を確保することで、児童の中にある不安な気持ちを解消させ、自分の考えを発言したくなる姿が見られた。このような授業展開の工夫が主体的な学びへと繋がっていくと学んだ。

また、授業を考える際、児童の実態を把握した上で、その授業のゴールとなる姿を見通すことが大切であると学んだ。

イ 学級づくりについて

児童の状況に沿って学級内の掲示物を工夫することが大事になる。その日に授業内での活動(図画工作や生活、係活動等)を可能な限り、すぐに掲示しておられた。翌朝、掲示物を見て喜ぶ児童の姿から、教師のそのような工夫や努力が児童の学習意欲を向上させ、主体性を引き出していると学んだ。

また、朝学活や休み時間等に自分達で調べたものを発表したり、プリント類を綴じたりする等、児童自身が自ら行動できるよう促しておられた。この促す場面を見極めることこそが児童の主体性を深める教師の重要な行動だと思う。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座での講義や講演を通して、京都府が求めている教員としての必要な資質・能力について学ぶことができた。その中で、特に自身が学びを大きく深めた講座は2つある。

(1) 道徳教育について

「心のはたらき」を育成する道徳教育では、学校生活の中でも児童一人ひとりの心の変化を言葉や行動、表情から読み取る必要があると学んだ。特に、授業づくりでは中心となる発問を設定し、道徳的価値を深められるように追質問や全体で考える時間を設け、児童の思考を揺さぶる大切さを学んだ。このような授業を目指すために、考えを発言できる雰囲気を作り、児童とのやり取りを大切にしたい道徳教育を行っていきけるようにしたい。

(2) ICTを活用した授業実践について

「〇〇のためにICTを活用する」という言葉が特に印象に残っている。ICTを目的として活用するのではなく、一つのツールとして活用することが大切であると学んだ。また、授行だけではなく、授業以外での活用を行うことで、様々な場面から児童の学習を支援することができることを学んだ。児童の多様性を大切にするためにも、ICTの活用方法を自ら調べ、児童の個別最適な学びを実現できる教師を目指したい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

授業実践では、前期・後期合わせ6回授業をさせていただき、教師の発問に対する児童の反応への追質問やそれを学級全体で共有していく声掛け等、授業を行う際の基本的な技術を身に付けることができたと考えている。また、同じ授業を他の学級でさせていただき、学級ごとに異なる児童の反応から何が必要か、どのような発問が良いか等、教材研究の大切さを実感した。その際、活動内容を目的として捉えるのではなく、手段として取り入れるように展開していくことが重要になると学んだ。

(2) 見守る力(児童理解)

演習を通して、児童一人ひとりに同じ対応をすることだけが良いとは限らないことを実感した。同じ対応をするべき場面と児童一人ひとりの状況に合わせた対応をする必要がある場面とをきちんと見極める必要があると学んだ。この学びから、実際に児童と関わる際、児童の声のトーンや話すスピード、表情から見守るべきか支援が必要であるかを読み取ることを心がけた。児童の成長が見られた際はすぐに褒めることで、児童との信頼関係を築き、児童理解に繋げることができたと考えている。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

年度末や年度始めの児童が登校していない時期での仕事も経験させていただき、教師が行うべき業務が大量にある中、児童の純粋な笑顔やその成長を一番近くで感じることができる教師という職種にやりがいを感じ、より一層教師になりたいという思いが強くなった。謙虚な姿勢を忘れず、常に学び続ける姿勢を大事にし、自己研鑽に励んでいきたい。

(2) 今後の課題

演習を通して、積極性や時間配分、目標を見通した授業計画等、自身が今後、研鑽を続けるべき点は山積みであることも自覚した。しかしながら、講座で学ばせていただいた「授業力」と「見守る力(児童理解)」を活かして、児童が毎日笑顔で登校する姿を一番近くで見守り、自身の課題点を少しずつ改善していき、主体的に学びを深められる学級づくりに努めていきたい。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童が深く考える学級、授業づくりについて」**

受講生氏名：相良果歩

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

教育実習を終えて、私は児童の発言によって作られる授業の難しさを学んだ。児童の発言によって作られる授業とは、児童全員が深く考え、言葉にしなければ成立しないと感じた。よって、演習では児童が深く考えることができるように発問の工夫の仕方や児童同士の活動の取り入れ方、深く考え共有することができる学級づくりを研究したいと考え、テーマを設定した。

(2) 研究方法

ア 授業内での発問の仕方やグループワークの取り入れ方を観察する。

イ 児童が深く考えることができる発問やそのために効果的な学習活動を取り入れた授業実践を行う。

ウ 授業実践を振り返り、考察する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第3学年、後期は第5学年で演習を行った。先生方の授業中の発問の仕方や活動に入るための導入、児童同士の活動を入れるタイミングなどを見て学んだ。授業観察で学んだことを生かして、児童が深く考えることができるように発問の仕方を工夫したり、自ら考えようとすることができるような動機付けを意識したりして、授業実践を行った。また、普段の会話などから児童との関係性を作り、その関係性を授業に活かすことができるように意識した。

(2) 演習校で学んだこと

ア 発問の工夫とそれに連なる追究の発問

先生方の授業を観察させていただき、発問の工夫を学んだ。授業の課題として、児童にとって身近なものを例に挙げ、課題に取り入れることで、興味を掻き立て、知りたいと思える授業になることが分かった。また、考えさせたい発問だけで終わるのではなく、児童の発言や小さなつぶやきに追究の発問をすることで、児童の考えをさらに深めていくことが分かった。さらに、追究の発問は発言をした児童だけではなく、学級の児童全員の考えを深め、さらに広げることができると学んだ。

イ 児童の実態の把握

前期の第3学年の授業実践では、2つの学級で同じ道徳の授業を行った。この経験を通して、学級の雰囲気や児童の実態によって、同じ発問でもまったく違う反応や、考え方が出てくることが分かった。自分のみで考えるほうが深く考えることができる学級であるのか、児童同士で話し合いながらのほうが深く考えることができる学級であるのかは、学級の雰囲気や児童の実態によって大きく変わった。これらの違いは、活動を行うタイミングや発問方法、授業の入り方など授業計画に大きくかわるということが分かった。よって、学級や児童の実態を把握して、それに最適な学習方法をとる必要があることを学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、京都府の教育現場で活躍しておられる先生方や、教育委員会の方々の講義を聞き、いろいろな視点から教育について学ぶことができた。さらに、自分とは違う校種の教員を目指す演習生とも交流することで、同じ校種の演習生と話している時にはなかった新たな視点の意見も、交流することができた。「夢・未来」講座で学んだことをすぐに演習で実行に移すことで、さらなる効果を感じ取ることができた。演習校で起こったことを実際の例にして「夢・未来」講座の内容について考えることでさらに深く考えることができた。その体験から、校種に関わらず、交流することの大切さも学んだ。

この講座を通して、教師が学び続けることの大切さを再確認することができた。実際に講座の講師をされた先生方が学び続けている姿を示されていた。教師の仕事に少しでも関係があり、子どもたちのためになる資格を取得したり、教育に関わられている方々とコミュニケーションをとり、新たな考えを取り入れたりすることの大切さを学んだ。私も子どもたちのことを考え、新たな考えや知識を取り入れ、行動するなどの努力をし続け、力を付けていきたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

私が教師力養成講座で身に付き、成長した力は大きく二つある。

一つ目は、教師に最も大切な授業力である。たくさんの先生方の授業や、「夢・未来」講座でも授業を作るための術を学んだ。学級の児童の実態からどのような指導方法が適切であるかを考え、授業を工夫して作り、実践することができた。さらに、今回の演習で本格的には初めて ICT を取り入れた授業を行ったことで、ICT を使う場面の選択も児童の実態とともに考える必要があることも知った。これらの経験は、教師として最も大切な授業力を大きく伸ばすことができた。

二つ目は積極的な姿勢である。演習が始まるにあたって、自ら動き、自ら学ぶことを意識して演習を始めた。しかし、始まった直後は、どのように自分から動くことが正しいのかわからなり、質問をしたりする中で、意識することなく自ら動くことができた。また、学習指導案や授業、児童に関することについて質問することで、自ら学ぶ姿勢も成長させることができた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

実習中には演習校の先生方が、常に児童のためになることを考えておられる姿を見せていただいた。さらに、演習をさせていただいた約4ヶ月間でも、多くの児童の成長を見つけることができた。これらのことから、児童の成長を第一に考える教師になり、児童の成長を最も近い場所で感じることができる教師という立場に立ちたいという気持ちを再確認することができた。私自身が目指す教師像に近づくことができるように、教師力養成講座で学んだことを活かし、教師として、成長し続けたい。

(2) 今後の課題

今後の課題は、児童との適切な距離を保つことある。演習中に児童と仲良くなることに意識を置きすぎたことで、教師と児童の距離を適切に保つことができず、児童と友達のような距離感になってしまった。このような距離感になってしまうと、指示を出す時に、上手く伝わらなくなってしまう場面があった。しかし、児童と距離が近く、すぐに仲良くなるという点においては、良い点であるとも考える。このことから今後は、自分に合った児童との距離感を作り出すことができるように努めていきたい。

第16期「教師力養成講座」を終えて
「“わかる授業”づくり～ユニバーサルデザインの視点から～」

受講生氏名：金尾 敢巳

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

児童にとって“わかる授業”を展開していくことで、教師と児童とのよりよい信頼関係を築けるのだと考える。その信頼から、学習への主体性や意欲が生まれると思う。そこで、“わかる授業”を実践するために、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを研究したいと思い、このテーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 先生方の発問や言葉かけ、板書、教室の環境整備等の工夫を観察する。
- イ 授業実践の中で、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを行う。
- ウ 自身の実践内容を振り返り、考察する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第5学年、後期は第4学年で演習を行った。各学年の先生方が行われている授業や教室環境を観察し、児童を誰一人取り残さないようにするための工夫を学んだ。授業観察で学んだことを活かし、自身の授業で児童に見通しを持たせたり、対話的な活動をさせたりするような授業実践を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア 授業における共有化・視覚化・焦点化

先生方の授業を参観させていただく中で、意見交流から学級全体の「共有化」を図ることで、児童が自然と友達の意見に耳を傾けることができると学んだ。そして、自分の意見と友達の意見を比較することで、学習内容の理解を深めることができるのだと学んだ。また、ICTを活用して、児童一人一人が意見を交流したり、先生が児童の考えを紹介したりすることで、多様な共有化が生まれるのだとわかった。

授業実践では、言葉や文字だけでは伝わりづらい内容を、具体物を使って「視覚化」することで、児童にとって分かりやすい授業づくりができた。授業の導入には、本時の学習の流れを板書して矢印で示すことで、授業の進行度合いが可視化できると気づいた。そして、児童一人一人が授業の見通しを持つことで、授業に対する不安をなくすことやテンポの良い授業展開をすることにつながると学んだ。

また、授業計画の段階で、授業のねらいや活動を絞って、「焦点化」することで、集中して学習に取り組み、目標を持って授業に臨めるのだと学んだ。

イ 教室環境の工夫

演習を行う中で、児童が「わかった」と感じる授業をするためには、児童が集中して学習に取り組める環境づくりが不可欠であると実感した。

黒板周りに様々な掲示物を張ると、刺激になって学習の集中を妨げてしまうことを学んだ。そこで、授業で使わない掲示物のある箇所には、カーテンを覆うような配慮をすることが、授業に集中するためには効果的だと気づいた。

教室の整理整頓では、それぞれの机の位置を決めるための目印を床につけておき、机をきれいに並べることで、整った環境で集中して学習ができるのだと学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、道德教育や学級経営、児童理解などの京都府の教員に必要な様々な資質・能力について学ぶことができた。また、校種を超えてたくさんの講座生と意見交流を行う中で、新たな価値を見出すことができ、考えの幅を広げることができた。

特に印象に残っているのは、「道德教育」についての講義である。道德は、心を勉強する時間であり、児童の道德性を養うように進めていくことを学んだ。道德教育を進めるためには、外面（行動）と内面（心）の区別を付けることが必要である。そして、生徒指導と道德教育の両面から道德性を養うことが重要だとわかり、実践していきたいと考える。例えば、生徒指導の面では、廊下を走るなどのルールを破る行動をしている児童には、行動そのものを指導し道德性を養うようにする。道德教育の面では、「特別の教科 道德」の時間を要として学校生活を通し元となる「心」を育て、道德性を養うことが大切であると知った。実際に演習校での先生方の指導を参観し、道德教育の重要性を実感することができ、これから実践していきたいと考えた。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 気づき、対応する力

演習を行う中で、児童の些細な変化にも気づき、対応する力を身に付けることができた。普段から児童が「見てくれている」と感じられるように、それぞれの児童が持つ良さや特性を把握し、気づいた変化を踏まえて話しかけるように努めた。

また、朝の会では健康観察を通して、その日の児童の様子を把握することが大切だと学んだ。その中で、児童を取り巻く状況によって、日々変わる児童の気持ちに共感しながら、臨機応変な対応ができたことも成長した点だと考えている。

(2) 授業力

たくさんの先生方の授業参観や計8回の授業実践を通して、授業力を伸ばすことができた。初めは、児童の授業中の理解度や表情を把握する余裕がなく、指導案通りに進めることばかり考えてしまっていた。しかし、事後研修で先生方からアドバイスを頂き、机間指導を中心として児童一人一人の授業進捗やつまづきを把握することが大切であると学んだ。そして、授業実践をする中で、児童と共に成長することの楽しさを実感したことも成長した点であると考えた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座での活動から、京都府の教育の魅力をたくさん感じる事ができた。その中でも、実際の教育現場で、温かみのある指導をしておられた先生方のように、児童のことを第一に考える指導をこれから心がけていきたい。そのためにも、児童の些細な変化や良さに気づく力を養いながら、学び続けていきたいと考えている。そして、これから社会の担い手となる京都府の子どもたちに、たくさんの経験を味わわせ、温かみのある指導ができる教員を目指していきたい。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、授業の質を高めることである。児童一人一人が授業の中で“楽しい”や“わかった”などと感じられる授業づくりをすることが、児童とのより良い信頼関係や学級経営にも繋がる。そこで、学習でのゴールや活動に見通しを持たせることを大切にしながら、児童の実態に応じた授業構成ができるよう学び続けていく。そのために、様々な児童の実態を把握することや充実した教材研究ができるように、自己研鑽に励んでいきたいと考えている。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の声が生きる授業づくり」**

受講生氏名：太田 遥香

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、教師が学びを提示するのではなく児童が学びを作り上げていくことが必要であると考えた。しかし、以前教育実習で授業を行った際、知識を一方的に伝えるだけの授業になってしまった。そこで、教師が学ばせたいことを一方的に伝えるのではなく、児童の声が反映されるような授業づくりの工夫を知ったり考えたりしたいと思い、この演習テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 授業見学を通して、授業展開や発問方法を学ぶ。
- イ 体験授業や研究授業の中で、児童の声が反映される活動を取り入れる。
- ウ 自身の実践を振り返り、考察する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

授業の中で児童の言葉をどのように反映しておられるかに着目しながら、先生方の授業を見学した。特に、めあてを児童と作る際は、教師がどのように児童の発言を拾うのか、学びのねらいに迫るためにどのような切り返しをするのかについて着目した。そして、学んだことを自身の授業でも取り入れて実践することで、児童の意見を授業に反映することを意識した。

(2) 演習校で学んだこと

ア 児童の意見を授業に生かす工夫

授業見学と、実践を通して2つの工夫を学んだ。

1つ目は「児童と共にめあてを考える」という工夫である。私は、児童と学びを作り上げるためには、児童自身が何を学ぶかを主体的に考える必要があると考えた。そこで、めあてを考える活動を授業に取り入れた。しかし、めあてが曖昧であったため、ねらいに迫りることができなかった。その後の事後研でご指導いただいたことから、児童と共にめあてを考えるには、児童の言葉を生かしつつも、あらかじめ押さえる点を持つておくが必要であると学んだ。

2つ目は「考え方を児童の言葉で名づける」という工夫である。まとめて整理する際に、それぞれの考え方に名前をつけさせることで、自分達の学びとして主体的に捉えることができたと感じた。また、分類して考え方を比較することで、特徴を捉えることができ、理解も深まった。

イ 児童の意見を引き出すための働きかけ

児童の声を生かすためには、児童が意見を出しやすいことが大切である。そこで、道徳の授業では、児童が意見を出しやすいような働きかけを意識した。具体的には、発問をしてから間を取ることを実践した。そうすることで、多くの児童が自分の中で考えを持って授業に臨むことができたと推測できる。また、児童の発言の際は、児童の方をしっかりと見て相槌を打つことで、安心して発言ができると考えた。このことから、教師の立ち振る舞いや言葉選びで、児童が意見を出しやすくなることがわかった。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

近年の教育に求められていることや、京都府が教育に対してどのような取組を行っているのかなどを具体的に学ぶことができた。特に印象的だったことが2つある。

1つ目は「主体的・対話的で深い学びのための授業実践」である。この講義では、授業を受けることで主体的・対話的で深い学びを体験できた。この経験から、ただ知識を暗記するのではなく、体験的に学ぶことで印象に残り、更に学びたいという意欲が湧くと考えた。

2つ目は「ICTを活用した授業実践について」である。この講義では、ICTの活用で表現の幅が広がることを事例と共に学んだ。表現方法を選択できることは、児童にとって主体的な学びとなり、児童の個性を尊重することにもつながるといえる。また、教師側の視点として、ICT活用が目的となつてはいけないことを学んだ。今後は、ICTを取り入れる意義を見い出した上で活用していく。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

たくさんの先生方の授業や指導の姿を見ることで、自分の授業づくりの引き出しを増やすことができた。特に、机間指導において成長を感じている。個別学習では、児童の意見を把握することを意識した。座席表をもち、メモをしながら机間指導を行った。それを活用して意図的な指名を行い、幅広い意見を全体で共有することができた。また、机間指導の際に児童の考えに線を引くことで、「先生に見てもらえた。」と実感させ、自信を持たせた。この結果、挙手する児童を増やすことができ、多くの意見を聴くことができた。机間指導はつまづいている児童を見つけて支援するだけでなく、その後の授業を意図的に作るための効果もあるとわかった。

(2) コミュニケーション力

演習校では、先生方と積極的にコミュニケーションを図ることができた。放課後の教室整備の時に、授業のことや児童のことを伺うなどした。そうすることで、授業見学だけでは気づけなかった授業の工夫や指導観などを知ることができた。帰る際には、お礼の言葉に今日の学びを付け加えて伝えるなど、少しプラスして話すことでより良い関係を築くことができると学んだ。チーム学校において、教師間の繋がりが必要不可欠である。そのため、人間関係を築く力は更に磨いていきたい。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、現場における教師の仕事を間近で見学し体験することで、自分が教師になる姿を具体的に想像することができ、覚悟が芽生えた。また、児童に「来年先生になったら私の担任になってね。」といった言葉をかけてもらったことから、教師になりたいという思いが更に高まった。今後は、未来を創っていく子ども達のために、向上心を持ち続けて努力していく。

(2) 今後の課題

課題は、授業力である。児童にとって学校生活のほとんどが授業である。児童に授業が楽しくて、待ち遠しいものと思ってもらえるように努力をしていく。具体的には、活動を児童が興味深いものにしたり、授業の中で「できる。」を実感することで自己肯定感を高めたりすることなどを意識したい。また、今の私はあせりが児童に伝わってしまったり、上手く児童の意見を板書にまとめることができなかつたりなどの課題がたくさんある。一つ一つ改善していくことで、児童が主体的に楽しく学べるような授業づくりをしていきたいと考えている。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「対話的な学びを通して深める授業づくり」**

受講生氏名：西本 れんげ

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマの設定理由

学習指導要領で示されている「主体的・対話的で深い学び」に関わり、対話的な学びを通して児童の考えがどのように深まるのかを研究したいと考え、このテーマを設定した。対話的な学びには、教師との対話、児童同士の対話、自己との対話があると考え、それぞれの対話を促進できる授業づくりを目指した。

(2) 研究方法

- ア 授業内の児童同士の対話、教師との対話、自己との対話を観察する。
- イ 体験授業、研究授業において、対話的な学びを通して深める授業を実践する。
- ウ 授業実践を振り返り、考察する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

前期は第3学年、後期は第1学年で演習を行った。授業実践では、グループワークやペアワークを通して児童同士が対話し、学びの内容を深める授業づくりを意識した。また、個々の児童の発言を教師が全体に問い返すことで、学級全体で対話する授業を実践した。

(2) 演習校で学んだこと

ア 学習意欲を高める対話

授業を見学させていただき、児童同士の対話を通して児童の意欲を高められることを学んだ。例えば、第3学年の算数の授業ではそろばんを習っている児童が前に出てそろばんの説明をした。その結果、他の児童がその児童に質問したり、自分でもやってみようとしたりする姿が見られた。教師の説明だけでなく、児童同士の対話が学習内容への意欲を高めるのだと考えた。

また、児童が個別に自分の考えを整理するための時間がなければ、児童同士の対話は難しいということを教えていただいた。児童同士の対話の学習効果を高めるために、自己との対話という視点を大切にしたいと考える。

イ 共感的な対話

道徳の授業見学や研修を通して、教師の共感が児童の本音を引き出すことを知った。そこで、道徳の授業実践において、児童の考えに共感する対話を意識した。その結果、正直な気持ちを言い合う児童が増え、多くの児童が当事者意識を持って自分の行動を振り返ることができていた。対話は、教師の共感的な態度によって充実させることができることを学んだ。

ウ 児童の実態に合わせた対話の工夫

第1学年での授業実践では、児童同士が言葉で対話を行うのは難しさがあると判断した。そのため、ジェスチャーも使って意見を伝えたり、相手の意見に一言で反応したりといった、対話の方法を工夫した。ただ会話をさせるだけでなく、児童同士で良かったところをより多く見つけさせるなど、友達とともに授業に参加している意識を持たせることが大切であることを学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、演習での学びと照らし合わせ、学級経営や授業づくり、児童理解について学ぶことができた。特に印象に残っている講義は、児童の声を生かす授業を目指した「授業実践講座」である。その中で最も大切だと考えたのは、教師が発言内容を厳選することだ。教師の説明を最低限に抑え、児童の発言をもとに全体への発問を行うことで、児童が主体的に考えを深められることが分かった。また、児童に考え方を解説させることで他の児童の関心を高め、解説した児童の自己肯定感も高められるということを学んだ。児童が授業をどのように感じるかということを常に意識し、児童の声を生かす授業づくりを行いたい。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

授業見学を通し、授業の基本は環境整備であることを意識するようになった。授業内容に入る前に不要な教材を片付け、準備物を揃えさせたことで、落ち着いた授業を行うことができた。

また、授業中の指示や説明、発言を簡潔にすることができた。指示は「～しましょう」、説明は「～します」を語尾につけることで、児童に伝えたい内容を明確化した。発問は言い換えず、決めていた言葉通りに発問することで、児童に何を考えてほしいのかが伝わりやすくなった。

(2) 児童理解

演習では、授業以外での児童との関わりを大切にし、生活面における児童理解を行うことができた。授業内でのみ関わっていた時は、どの児童をどのように補助すべきか判断するのが難しかった。そこで、授業外にも児童と目線を合わせて話すことで交流を深め、児童の変化に気づくことができるようになった。

また、宿題の丸つけや前時の授業見学から、学習面における児童の苦手を個別に把握した。学習における児童理解は、授業中の机間指導に生かすことができた。

(3) コミュニケーション力

演習では、先生方と積極的にコミュニケーションが取れるようになった。用事があるときだけでなく、児童の様子や授業の疑問点などを担任の先生と話すようにした。自分から話しかけることで先生の児童観や授業の工夫を教えていただくことができ、児童理解や授業づくりに役立てられた。

また、職員室で電話対応を行わせていただいたことで、学校外の人との関わり方を学んだ。今後も自分が学校を代表しているという自覚を持ち、丁寧な対応を心がけたい。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、常に児童の目線でわかりやすい授業デザインを工夫し続けていく面白さを感じた。また、先生方の児童の成長を願う想いを知ったことで、同じ教員として共に児童の成長を支えたいという気持ちが強くなった。自身も教員間の連携を大切に、児童の成長を支えられる教員になりたいと考える。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、児童に指示をすべき場面と、考えさせる場面を見極める判断力を身につけたい。これまでの授業や生活指導では、指示を中心に行っていた。しかし、児童が主体的に行動するためには、何をすべきか自分で考えさせることが重要である。

また、児童への肯定的な声かけを積極的に行うようにしていきたい。ボランティアを通して児童の成長に気づき、具体的に褒めることを実践していく。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の興味を引きつける授業づくり」**

受講生氏名：杉島 信吏

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

児童の興味を引きつけることは、授業を行うにあたり学習の質を高める重要な要素の一つである。文部科学省では、「主体的・対話的で深い学び」が掲げられており、児童が自ら学習に取り組むためには、教材や内容に興味・関心を持っていることが重要である。そこで、具体的にどのような手立てを行うことで児童の興味を引きつけることができるのかについて研究したいと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究方法

- ア 先生方の授業から、児童の興味を引きつける工夫について学ぶ。
- イ 児童の興味を引きつけるための工夫を考え、実践する。
- ウ 授業実践を振り返り、考察する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 実践内容

先生方の授業を観察し、児童の興味を引きつける工夫について学んだ。また、先生方に児童の興味を引きつける工夫について質問を行い、考えを深めた。これをもとに児童の興味を引きつけるための工夫を自身なりに考え、授業実践を行った。

(2) 演習校で学んだこと

ア 日常生活と関連させた導入

先生方の授業を参観させていただき、児童の日常生活に関連した話を導入ですが、興味を引きつける手立てとして効果的であることが分かった。身近な出来事を取り上げることが、児童にとって親しみやすく、興味を持って学習に入ることができると学んだ。

自身の実践でも日常生活と関連させた導入を行った。その際、導入の話題となる行動を事前に児童へ印象づけるようにした。その結果、児童が学習に興味を持った。児童に教師が意図したことを印象づけることは、日常であったことに自ら気づいたと感じさせ、学習への興味を引きつけることができる。

イ イメージを持たせるための工夫

児童の興味を引きつけるには、具体的なイメージを持たせることが大切であると分かった。先生方は、児童に馴染みのない内容は動画を視聴させたり、児童の身近なことに置き換えたりすることで、児童の理解を深め興味を引きつける工夫を行っておられた。

自身の社会科の授業実践では、役割演技を取り入れることで児童の興味を引きつけることができた。役割演技を行うまでは、積極的でない児童もいたが、行ったことで発言する児童も増え理解も深まった。

このことから児童の興味を引きつけるための工夫を行うことは、児童の積極的参加を促すことにつながると考えられる。しかし、児童の興味を引きつけるための工夫が目的とならないように、留意しなければならないことも学んだ。こちらが用意した活動を行うためにその他の時間がおろそかになってはいけない。全体を通して活動を有効に活かしているのか考え、授業づくりを行うことが重要である。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、実践的な視点から教育について学べたことで、自身の教育観がより具体的になった。「一人ひとりの子どもを主語にする学校をつくる」の講演会では、教育現場において重要視される個別最適な学びや協働的な学びにも懸念点があることを学んだ。個別最適な学びは孤立するという側面があり、協働的な学びは同調圧力という問題が存在する。この問題を解決するには、二つの学びを独立して考えるのではなく一体的に行うことを重視していく必要がある。そのためには、学習形態を児童自ら選ばせるという方法で、自身で進めたい場合は個別学習を行い、知りたいことや共有したいことがあればクラスメイトと話し合うというものだった。児童の主体性を尊重して学習を行うことで、それぞれのデメリットをカバーすることができると分かった。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 授業力

多くの授業経験から自身の授業力を伸ばすことができた。特に児童にとって分かりやすい板書のレイアウトができるようになった。黒板の文字の大きさについては、これまで大きければいいという考えを持っていた。しかし、学年によって適した文字の大きさにすることは、黒板に書ける情報量を調節できることや学習内容が分かりやすくなる等のメリットがあった。また色の組み合わせによっても見やすさが違った。組み合わせを工夫することで強調したいことを伝わりやすくできた。このように児童の目線に立って板書を考えることで分かりやすい板書のレイアウトができるようになった。

(2) コミュニケーション力

様々な場面で積極的にコミュニケーションを取ることができるようになった。これまで疑問点や気づきを先生方に聞けないこともあった。しかし、先生方に話しかけることで、児童との関わり方や授業で意識しておられることについて学ぶことができた。

学校では、問題事象等が起こった場合チームで対応する。その際に教師間でコミュニケーションをとることで解決を図っていた。また、保護者との連携を取る上でもコミュニケーションは重要だった。先生方は、連絡帳や電話連絡を通し、問題があった時だけでなく頑張ったことやできたことなど児童の様子を伝えておられた。このようにコミュニケーションの重要性を理解したことで、積極的にコミュニケーションをとるようになり、より多くの学びを得ることができた。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

4か月間の演習を通して教師のやりがいについて自身の考えを持つことができた。1つの学級に長く入るという経験がこれまでなかったが、演習では児童の成長過程を長い期間で見ることができた。その様子を見ていると教師が児童を導くということがどれほど素晴らしいことであるかを実感した。自身も児童を導き成長させられるようになろうと決意した。

(2) 今後の課題

今後の課題は、教師としての児童との距離感を掴むということである。これまでは、学生としての距離感で児童と接してしまうことが多かった。しかし、これから教員として関わる際に、距離感が近すぎると指導を行う上で不都合が生じる可能性がある。そうならないために、教師として児童との距離感を意識し、関わり方を考えていく。

**第16期「教師力養成講座」を終えて
「児童の主体的な活動を導く授業づくり」**

受講生氏名：石野 夏実

1 演習テーマ設定理由及び研究方法

(1) 演習テーマ設定理由

変化の激しいこの時代では、「主体的・対話的で深い学び」を通して、様々な事象に対して主体的に考える力を養うことが求められている。教員として授業を実践するにあたり児童の意欲を引き出せるような働きかけが必要不可欠であると考え。そこで、児童が主体的に学習したり、考えたりする活動を導くには、教師がどのように働きかければ良いかをより深く研究したいと考え、このテーマを設定した。

(2) 研究方法について

- ア 担任の先生の発問の仕方、発言へのフィードバックを観察する。
- イ ICTの活用や、視覚的な資料を使用した授業を実践する。
- ウ 授業実践を振り返り、成果や課題について考察する。

2 演習テーマに関わる実践内容及び演習校で学んだこと

(1) 演習テーマに関わる実践内容

授業実践するにあたっては、積極的に視覚的支援を行うことを意識した。児童が興味を持って学習に取り組むことができる工夫は何かを常に考え、教材研究を進めた。また、担任の先生の授業を観察させていただくことから、普段の授業でどのような声掛けや授業づくりをされているのかを学んだ。

(2) 演習校で学んだこと

ア 児童の主体性を引き出すための工夫について

児童が、授業において「もっと学んでみたい」「もっと知りたい」と思えるような工夫を考え、実践することができた。第1学年の算数においては、視覚的支援となるように、イラストやフラッシュカードを使用した。それによって、児童の中でイメージがより浮かびやすく、「わかる」授業を実践することができたと感じる。また、身近な生活場面に結びつけて考えられるような声掛けをすることを通して、主体的に学習に取り組む態度をより育めたのではないかと考える。第3学年で行った研究授業の国語では、パワーポイントを用いてクイズをしたり漢字の由来について説明したりした。視覚的に捉えやすい教材を入れることで、授業全体を通して主体的に授業に参加できていたと感じる。これらの経験から、児童の主体性を導くためには教材研究が欠かせないことはもちろん、児童の興味・関心を引き出すにはどうすればよいかを常に意識することが大切だと学んだ。

イ 児童全員が授業に参加できる手立てについて

教室には、様々な実態を持つ児童がいる。誰一人置いていかない、全員が理解できる授業を目指して日々取り組んでおられる担任の先生の姿を見て、教師としてそのような環境づくりをしていくことの大切さを実感した。具体的には、スモールステップを手立てとして授業を行うことが効果的であった。新しいことを学ぶ時には、特にそれを重視することが大切である。そうすることで、全員が同じスピードでねらいに到達することができ、全体で「できた」という思いを共有する授業の実現が可能になると学んだ。

3 「夢・未来」講座で学んだこと

「夢・未来」講座では、教員をする上で身につけておくべき知識や、これからの時代の教育に携わるものとして身につけておくべき資質・能力について学ぶことができた。その中でも、「小学校における外国語教育」についての講義が特に印象深く、そこでは「休み時間の姿を再現する」という授業スタイルを紹介しておられた。これは、英語でのコミュニケーションを促進するために非常に効果的であり、実現するための教室環境や教材の工夫などは、自分が外国語教育をする際に積極的に取り入れたいと感じられるものだった。また、外国語授業に初めて触れる児童に対して、「勝負の導入」をすることで、心をつかみ、児童を英語好きにさせるというお話も印象的だった。そのための手立てとして、イラストを使用したクイズをしたり、身近で英語が使われている例を出したりすることを示しておられた。教員として、これらを活かして児童を英語好きにしていきたい。近年さらに重要視されている外国語教育について詳しく知ることができ、これから積極的に活かそうという思いが強くなった。

4 教師力養成講座で身に付けた力や成長したこと

(1) 児童の実態に合わせた授業力

養成講座では、同じ内容の授業を2回させていただいた。1回目に上手くいかなかったときは、周りの先生方や実習生からアドバイスをもらい、2回目に活かすことができた。また、学級によって実態も違うため、それも加味して授業を組み立てることを意識した。児童の実態に合わせて視覚的支援を取り入れたり、ワークシートを作ったりすることを通して、児童の実態に基づいて授業をする力を身につけることができた。「自分にはできない」と諦めてしまう児童が出ないように、細心の注意を払いながら授業づくりをする意識を、この演習を通して育むことができた。

(2) 児童理解力

児童と関わる上で、自ら積極的にコミュニケーションを取ることの大切さを改めて感じた。また、講義で学級経営には児童理解が欠かせず、すべての基本となることを学び、実際に演習を通してそれを実感することができた。朝の挨拶や休み時間の遊び、給食時間から掃除時間に至るまで、全ての時間が児童理解をする上で必要不可欠なものとなる。そして、児童一人一人の顔と名前を覚えることが、信頼関係構築の手助けとなることも学んだ。児童が学校でどのように過ごし、何を考えているのかを常に把握することの難しさを感じると同時に、児童理解のための努力は今後も欠かさないようにしたいと考える。

5 教職に向けた決意と今後の課題

(1) 教職に向けた決意

教師力養成講座を通して、授業をする上での自分の課題に気づくことができた。児童と関わりながら演習を重ねるにつれ、改めて教師になりたいという思いが強くなった。また、1日の終わりに担任の先生とお話をさせていただくことを通して、教員をする上で大切なことや、普段から意識すべきことに関して学びを深めることができた。教員としてこれからも学び続ける姿勢を忘れずにいたい。

(2) 今後の課題

今後の課題としては、時間配分についてである。普段の生活においても、効率的に時間を使い、余裕を持って業務を遂行する大切さを感じた。また、授業においても、開始時刻や終了時刻を守ることは、学校生活のメリハリをつけることにもつながると考える。時間配分は児童の集中力にも関わるものであるので、よく計画し、守っていくべきだと考える。授業をバランスよく行うために、これからも十分配慮していきたい。